



2024年度

公立小松大学

産官学合同シリコンバレー研修 報告書

公立小松大学 地域連携推進センター

目 次

1. あいさつ	学長	山本 博	1
2. 研修の概要・スケジュール			2
3. 研修報告			
I. 全体報告	地域連携推進センター長	香川 博之	4
II. 学生参加者の報告			
(1) 生産システム科学部 生産システム科学科	1 年	宮崎 陽太	6
(2) 生産システム科学部 生産システム科学科	2 年	國定 祈良	9
(3) 生産システム科学部 生産システム科学科	3 年	野坂 蓮	11
(4) 生産システム科学部 生産システム科学科	3 年	橋本 俊亮	13
(5) 生産システム科学部 生産システム科学科	3 年	藤森 遥陽	15
(6) 生産システム科学部 生産システム科学科	4 年	豊田 貴大	17
(7) 生産システム科学部 生産システム科学科	4 年	東出 健吾	20
(8) 保健医療学部 臨床工学科	1 年	有澤 愛純	24
(9) 保健医療学部 臨床工学科	1 年	小宅 駿輔	27
(10) 保健医療学部 臨床工学科	1 年	齋田 悠夏	30
(11) 保健医療学部 臨床工学科	1 年	佐藤 綾音	35
(12) 保健医療学部 臨床工学科	1 年	橋本 夏澄	38
(13) 保健医療学部 臨床工学科	1 年	村田 伊織	43
(14) 保健医療学部 臨床工学科	2 年	三輪 亜胡	46
(15) 保健医療学部 臨床工学科	3 年	川村 理帆	48
III. 企業・行政参加者の報告			
(1) 株式会社COM-ONE		米田 稔	50
(2) 株式会社日本オープンシステムズ		伊東 鼓乃	53
(3) 株式会社日本オープンシステムズ		藤井 果奈子	56
(4) 小松市		渡辺 雄也	60

カリフォルニアの空に

学長 山本 博

『2024 年度公立小松大学産官学合同シリコンバレー研修報告書』をお届けできますことをうれしく存じます。大学を代表し、本事業に関わっていただきました皆さまに感謝申し上げます。

一．功労者真田茂先生のご逝去

悲しいニュースからはじめねばなりません。シリコンバレー研修を初回から牽引されてきた真田茂特任教授(初代臨床工学科長・地域連携推進センター長)が、本年6月、不帰の客とられました。開学初年度の2月、最初にシリコンバレーを訪ねた折、サンノゼ空港でレンタカーを借り、真田先生の運転で彼の地を回りました。木村繁男研究担当副学長、川上文清特任教授もいっしょでした。カリフォルニアはひろく、行く手には青い空がはてしなくひろがっていました。その空を、わたしたちは、大学創業の志と将来への夢を重ねて眺めていたにちがいありません。

昨年度のシリコンバレー研修には、真田先生は余命を宣告され加療中だった身を押しての参加であったことを、ご逝去後に奥さま(真田弘美石川県立看護大学長)から伺いました。ご葬儀には、シリコンバレーから Hiro さんこと榎本博之特任教授・B-Bridge International Inc. CEO も駆けつけてくださいました。法名極済院釋茂功とられた真田先生の蓮上のみ霊安かれと祈るばかりです。

二．超える力

昨年の研修時、宮橋勝栄小松市長、下坂翔太郎市職員とともに、サンフランシスコから南に向かう途中、Intuitive Surgical Inc. がシリコンバレー近郊にあるのに気づきました。同社は、世界最大の手術支援ロボット生産メーカーで、主力製品 da Vinci は業界シェアの80%以上を占めます。その時点では、この会社も今後のシリコンバレー研修での有望な見学先候補と思いましたが、帰国後、da Vinci の部品の8割が日本製であることがわかり、愕然としました。爾来、日本にこれだけの技術があったにもかかわらず、なぜ自国開発できなかったのか？という自問の日々がつづきました。わが国には高い技術があるのに、専門を超え、完成させる力が足りない、それが、わたしの結論です。いい方を変えると、いわゆる「死の谷」を超え、製品化する力、「ダーウィンの海」を超え、事業化する力が足りません。

シリコンバレー研修に参加する学生の皆さんには、ぜひそういう超える力と超えることに成功／失敗した実例を現地で感じたり見てきてほしい。わたしたちの公立小松大学は、幸い、理系、医系、文系の学部・専攻を擁する総合大学です。日頃の学士課程、大学院博士前期・後期課程での分野横断的な教育プログラムや、他学科・学部・専攻の学生、教員との交流を通じて、母校でも、専門を超える力、あるいは総合知を培ってほしい、と希っています。

なお、手術支援ロボットについて付記しますと、最近ようやく、国産の hinotori の実用化がはじまりました。講義や講演で医療支援ロボットの話をするとき、わたしは努めて hinotori の方を紹介しています。

三．謝辞

最後に、参加学生全員に奨学金を給付いただきました小松市、小松市内町家等での事前学修、シリコンバレーでの研修、事後の報告会にご参加いただきました産業界、官界の各位、本学学生、教員、職員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

研修の概要

本研修は、現地の企業見学やワークショップなどの実践的な学習を通して、国際感覚を養い、学生はその経験を今後のキャリア形成や進路決定の一助に、社会人は世界をリードする起業文化に触れ、新たな事業展開やキャリアアップに取り組む機会につなげる。

また、学生、社会人がともにワークショップなどに取り組むことで、地元企業、行政の社会人とネットワークを構築しながら、地域の未来を考える。

(1) 開催期間 8月25日(日)～8月31日(土)

(2) 開催場所 アメリカ合衆国カリフォルニア州 シリコンバレー

(3) 参加者 本学学生15名、企業参加者4名、随任教職員2名

学生	生産システム科学部生産システム科学科	1年	宮崎 陽太
	生産システム科学部生産システム科学科	2年	國定 祈良
	生産システム科学部生産システム科学科	3年	野坂 蓮
	生産システム科学部生産システム科学科	3年	橋本 俊亮
	生産システム科学部生産システム科学科	3年	藤森 遥陽
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	豊田 貴大
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	東出 健吾
	保健医療学部臨床工学科	1年	有澤 愛純
	保健医療学部臨床工学科	1年	小宅 駿輔
	保健医療学部臨床工学科	1年	齋田 悠夏
	保健医療学部臨床工学科	1年	佐藤 綾音
	保健医療学部臨床工学科	1年	橋本 夏澄
	保健医療学部臨床工学科	1年	村田 伊織
	保健医療学部臨床工学科	2年	三輪 亜胡
	保健医療学部臨床工学科	3年	川村 理帆
企業・行政	株式会社COM-ONE		米田 稔
	株式会社日本オープンシステムズ		伊東 鼓乃
	株式会社日本オープンシステムズ		藤井 果奈子
	小松市		渡辺 雄也
随 行	地域連携推進センター	センター長	香川 博之
	地域連携推進センター	事務局	山本 美咲

研修スケジュール

日程	日付	曜日	時刻	
1	8月25日	日	14:00 17:00 10:00 12:00 15:00 18:00	成田国際空港集合・出国手続き 成田国際空港出発 ～～以下、米国時間～～ サンフランシスコ国際空港到着・入国手続き 宿泊先ホテル到着、昼食、周辺散策等 【オリエンテーション】講師：公立小松大学特任教授/B-Bridge International, inc. CEO 榎本博之 夕食等
2	8月26日	月	9:00 10:45 12:00 14:00 18:00	【レクチャー】講師：公立小松大学特任教授/B-Bridge International, inc. CEO 榎本博之 ＊シリコンバレーのおさらいとアントレプレナーシップとは 【レクチャー】講師：DoorDash エンジニア 原健太 氏 ＊渡米経験についてやエンジニアとして働くことの意義など 【挨拶】講師：STS innovation, Inc. CEO 岸田陽世志 氏 昼食 【カルチャー&歴史探訪】 ＊Apple park visitor center、Google visitor center、Intel本社、Levi's stadium、B-Bridge International, inc. ほか 夕食等
3	8月27日	火	9:15 11:00 12:50 15:00 20:00	【企業訪問】Sodick America Corporation 【企業訪問】Rakuten USA, Inc. 昼食 【大学訪問】Stanford University ＊グループ行動による、フィールドリサーチ ほか 夕食等
4	8月28日	水	9:00-20:00	【サンフランシスコ・ベイエリア 視察】 ＊各グループ訪問先での視察や見学、アポイントを取ったの面会、課題解決に向けたインタビューやアンケート調査 ＊主な訪問先：在サンフランシスコ日本国総領事館、PIER39、カストロ地区、サンフランシスコJapan town、Fisherman's Wharf、ゴールデンゲートブリッジ、Westfield San Francisco Centre
5	8月29日	木	9:00 12:00 13:00 15:00 17:00	【展示会見学】ADAS&autonomous vehicle technology EXPO ほか 昼食 【発表準備】グループごとに資料作成、発表内容準備 【プレゼンテーション】グループ、個人での研修成果報告 ＊グループでの発表：課題解決策の探究のため研修中に行ったグループ行動とその成果など ＊個人での発表：印象に残った体験、マインドの変化、研修を通して得たことなど 【懇親会】関係者での懇親会（夕食）
6	8月30日	金	8:50 10:00 12:25	宿泊先ホテル出発 サンフランシスコ国際空港到着・出国手続き サンフランシスコ国際空港出発
7	8月31日	土	 15:30 16:10	～～以下、日本時間～～ 成田国際空港到着・入国手続き 成田国際空港解散

事前研修について

4月～8月にかけて実施（学生のみを対象とする事前研修を含む）

日程	日付	曜日	時刻	内容
1	4月10日 -6月26日	水	14:45-18:00	PBL型特別講義「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」（全8回） 岸本昌子特任教授、榎本博之特任教授による課題解決に関する事前講義
2	7月10日	水	14:45-18:00	第1回「学生向け事前研修」、第2回「学生向け事前説明会」 榎本特任教授による研修に求めるマインドについての説明、事務局による研修グループ、スケジュールの確認、手続きの確認など
3	7月17日	水	16:30-17:00	第3回「海外渡航健康講座」 公立小松大学保健管理センターによる渡航期間中の健康管理に関する注意事項など
4	7月24日	水	16:30-18:00	第4回「危機管理セミナー」 外部講師による海外渡航期間中の危機管理に関する注意事項、渡航時に必要な手続きなど
5	8月7日	水	13:00-17:00	第5回「ソディック加賀事業所見学」 現地訪問先Sodick America Corporationの加賀事業所を訪問し、現地訪問に向けた見学・事前説明など
6	8月8日	木	14:30-17:00	第6回「全体オリエンテーション・事前説明会」 前半：榎本特任教授によるオリエンテーション及び事務局による手続き・準備等の再確認、研修に向けた確認事項や注意事項の説明 後半：グループに分かれ、現地でのグループ行動の計画立案などのミーティング

2024 年度 産官学合同シリコンバレー研修について

地域連携推進センター長 香川博之

本年度の研修は、榎本博之特任教授（B-Bridge）の支援のもと、8月25日～31日に行われました。2019年に始まった本研修は、途中コロナによる中断をはさみ、4回目になります。昨年に小松市が加わり産学から産官学合同に拡張されて2回目です。

研修の目的は、故真田茂初代センター長によれば、「フィールドワークを通じて課題解決型学習に取り組み、シリコンバレーが現代のハイテク産業やIT産業の発展を先導した理由を考えること」、「その体験を社会人と学生とがグループワークの中で共有しながら様々な学びを深化すること」です。また、榎本博之特任教授によれば、「何度失敗しても挑戦し続けるマインドをもつこと」、「成功のためには、積極的（Proactive）に様々な人と繋がりを構築していくこと」で、それを体験できる最も適した場所がシリコンバレーであると言われています。

本年度の内容は、国内でのPBL特別講義とシリコンバレーでの研修の大きく二つで構成されています。参加者は、産官からの参加した社会人を核としたグループに分かれ、4月～7月まで特別講義で検討する課題を絞った後、8月に現地研修のフィールドワークにより情報収集し、課題解決案をまとめるという方針が、上田芳弘前センター長のもとで決められました。その打ち合せには、現地研修担当の榎本博之特任教授、特別講義担当の岸本昌子特任教授、研修参加経験のある初代センター長の故真田茂特任教授と鈴木郁斗助教が参加されています。参加者の募集まで行われた本年度の4月にセンター長を引き継ぎ、過去のアンケート結果などを参考にして、多少の改善を試みながら現地での具体的なプログラムを組み立てたものが今回の研修内容になります。具体的な研修プログラムについては省略しますが、昨年度からの主な変更点は以下の通りです。

本研修と組み合わせて行われてきた岸本昌子特任教授によるPBL特別講義「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」が、国際文化交流学科についてのみ単位化がされました。この講義では、グループに分かれ、国際協力や行政などのプロジェクトの計画時に活用できる一つの手法であるPCM（Project Cycle Management）手法について学び、産官からの参加者のもつ問題を分析し、解決策を考えるという作業を体験します。研修参加者は、この講義への参加は必須ですが、時間割的に重なって参加できない学生もいました。昨年度の反省点である講義と研修の連続性に配慮するため、講義のグループを基に、講義に参加できなかった学生を追加して研修グループを決めました。

小松市から学生に対して最大20名までの参加費助成を得られることになりました。また、社会人の参加費を学生と一律同額にしました。費用的には参加しやすくなったと思います。本年度の参加者は、企業から3名、小松市から1名、本学から学生15名（体調不良でキャンセルになった学生2名を含めない）となり、過去最大でした。さらに、経費削減のため、随員員をこれまでの4名から2名に削減しました。

サンフランシスコまで全員同じ航空便で移動しました。これまでは基本的に現地集合とし、到着時間の異なる複数の航空便を利用していました。各自で予約を取るという経験などができる反面、スケジュール調整や安全確認が難しいという問題がありました。ばらばらだと随行員の割当も難しくなります。

レンタカーを活用しました。Uber のみに頼るのではなく、スケジュールによっては大型車をレンタルすることで、空港からホテル、見学地へ一緒に移動し、経費を抑えることができました。

地元企業の現地法人の見学を加えました。地元企業とシリコンバレーの関わりについて知るため、(株) ソディックの現地法人に訪問し、シリコンバレーで開発する意義などについて説明を受けました。それに先立ち、石川県内にある工場へ出発前に訪問し、事前に基礎知識をつけました。

工業展示会に参加しました。研修期間中、一般に比べて企業の方に対して英語で話す機会が少ないと考えて、自動運転支援技術に関する「ADAS & Autonomous Vehicle Technology EXPO」に参加し、企業展示ブースを訪問して、英語で最新情報を得る実践的な機会を設けました。

研修成果報告会を帰国してからのみに行うことにしました。これまでは、現地でも発表会を行っていたため、最終日はホテルに籠もって準備するという状況でした。海外にいる時間をなるべく有効に使うため、本年度は本格的な発表用スライドの作成や発表練習などを現地で行いませんでした。その代わりに、帰国してから1ヶ月程度の準備期間を設け、グループごとに余裕を持って発表準備ができるようにしました。

本年度は、アメリカの驚くべき物価高と急激な円安ドル高によって、滞在費、移動費、航空運賃などが高騰したため、研修参加費は決して安くありませんでした。それでも頑張って参加した学生の顔は、出発前と帰国後で輝きが大きく違うと感じました。帰りの空港や報告会の時などで、知らない人にも積極的に自分から声をかけている様子がうかがえました。この研修で得られたものは、人それぞれだと思いますが、少なくともコミュニケーション能力の向上は全員に共通している気がします。

次年度については、最終報告資料やアンケート結果を参考にして、研修内容をさらに意義あるものにすべく改善したいと考えています。また、参加しやすいように研修参加費の削減についても検討できればと思います。

最後になりますが、本研修にご参加いただいた(株) COM-ONE、(株) 日本オープンシステムズ、小松市役所の皆様、地域企業としてご支援いただいた(株) ソディックの皆様に感謝申し上げます。また、現地での移動や講話などたいへんお世話になった B-Bridge International の皆様やその関係の皆様に感謝申し上げます。さらに、学生参加費を助成していただいた小松市に対して学生に成り代わり感謝申し上げます。

産官学合同シリコンバレー研修報告書

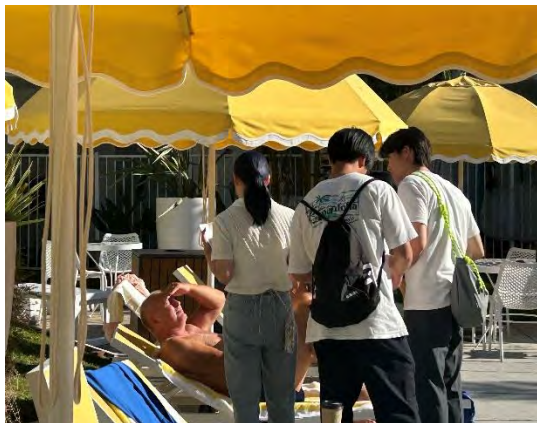
生産システム科学部生産システム科学科1年 宮崎陽太

研修参加の動機

私がこの研修に参加したきっかけは海外の文化や環境の違いを感じ、新たな考えを取り入れることです。海外研修には以前から興味を持っていたのですが、高校生の時は新型コロナウイルスの影響で行く機会がなくなってしまいました。なので今回の研修に参加できたことは、一度は諦めたことだったのでとても良い経験になりました。

課題解決に向けて

私たちの班では、小松市のまちづくり改革に対しての提案を目的に活動してきました。事前学習で課題としてもっていったものは主に2つあり、1つ目はふるさと納税の寄付金額を増やすこと、2つ目は広報戦略と現地行政のまちづくりについて調査するといったものです。ふるさと納税はまず資金を増やし、小松市を魅力的な街にするという最終目的があり、この課題はサンフランシスコの日本領事館の黒岩さんに事前に質問を考えて答えていただくというかたちで現地でどういったことを行っているのか調査しました。広報戦略と現地行政のまちづくりについては、黒岩さんにお話を聞くことと、街の人にアンケート調査を行うことで調査しました。



アンケートの様子



黒磐さんとの意見交換

結果として、まずふるさと納税の寄付金額の増加による財源の確保については、ふるさと納税では小松市内の人たちに購入してもらうというよりも、小松市外の人に利用してもらう割合が大きく、財源確保という目的では住みやすい街づくりをして住民税を確保していくといったアプローチの方が良いのではないかという意見を頂きました。ほかにもいくつかの意見を頂きましたが、結論としてふるさと納税では目的達成には難しいということになり、新たな提案としてシリコンバレーの起業のサイクルを応用した資金サイクルを考えることになりました。

次に広報戦略については、アンケートの結果ソーシャルメディアから行政の情報を得ている人が多いことや、若者の SNS の普及、位置情報から周辺地域の情報が流れる SNS の特徴などから、SNS を利用して活発に行政の情報を発信するべきだという結論になりました。

現地行政のまちづくりのためのアンケートや黒岩さんのお話では、文化や環境の違いを強く感じました。LGBTQ への理解の高さはカストロ地区のような LGBTQ を象徴する町があることや、サンフランシスコの移民の受け入れの広さからきていたり、今日本で問題になっている緊急性の低い救急車の呼び出し増加は、アメリカでは救急車を呼んだり治療することに高額なお金がかかるので、311 という気軽にかけられる番号が整備されていました。公共事業に焦点をあててみても、日本は政府が行っているところがほとんどなのに対して、サンフランシスコでは下水道や電気設備の整備も民営で行っていたりするので、そもそもの仕組みが異なっていたりしました。このようなことから、サンフランシスコの行政からそのまま当てはめることは難しいとなりました。

この研修で得られたこと

この研修では、環境による影響の大きさを 1 番に感じることができました。課題解決に向けた活動のなかで、カストロ地区の LGBTQ の広がりや、半年や 1 年に一回社員の 1 割が解雇される会社の制度、300 日以上晴れなので人が住みやすくてたくさんの人が集まるなどなど、自分になかった考えに出会えてとても良い刺激をもらうことができました。シリコンバレーに行く前は、コミュニケーションにとっても不安があり、アンケートもうまく聞けるのかわかりませんでした。ボディーランゲージをうまく使ったり強い熱意をもって接することで、言語の壁を超えることができ、たくさん話しかけることができ、よい経験ができました。

まとめ

シリコンバレーに行ったことで、日本にいただけでは体験することができなかった経験や新たな考え方を知ることができ、人として一皮むけることができたと感じています。

大学、小松市役所、日本の企業、現地の企業、学生、その他関係者の皆様には事前学習から大変お世話になりました。ありがとうございました。

シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部生産システム科学科 2年 國定祈良

はじめに

昨年も本研修に申し込みをしたが定員の関係で参加することができなかった。今年は無事研修に参加することができ、想像を超える充実感を得られた。私は家族旅行で海外に行く機会が何度かあり、アメリカも今回が初めてではなかった。新鮮さは感じたが特別刺激があったかと言われれば、「アメリカっぽいな（アメリカです）」くらいであった。しかし、研修メンバーは今回が初海外という人が多数で様々な刺激を感じていた。メンバーと話すると、ショックを受けたように話す人、目を輝かせて楽しそうに話す人など様々なリアクションで、自分と異なる視点に刺激を受けた。このようにお互い刺激を与えあう環境で5日間の研修を過ごすことができた。

研修の目標

今回の研修で個人の目標は「同世代から刺激をもらう」であった。日本にいと年功序列社会で若者として何かにチャレンジすることに抵抗があると私は感じていた。しかし、去年・今年と事前講義を受け、マインド一つで何にだってチャレンジできることを知った。ITで世界最先端を走っているシリコンバレーで同世代の頑張りを肌で感じ、前向きな危機感を持って帰りたい。そんな想いで活動に取り組んだ。この目標を達成させた出来事をまとめる。

まず、二日目に、トビタテ留学japanで一か月前から一人アメリカに渡り生活している「ダン」に出会うことができた。自己紹介で高校二年と聞いたときは、高校二年で大きなチャレンジをしている彼の行動力やマインドに圧倒され内心とてもテンションが上がった。その後も一緒に研修を回ることができた。色々な話をして刺激をたくさんもらうことができ、ダンとの出会いはかけがえのないものである。

次に、同世代と対話ができるチャンスであるスタンフォード大学でのフィールドワーク。夏休み期間であったので現地学生との交流は少なかったが、JETRO（日本貿易振興機構）のプログラムでスタンフォード大学の特別講義を受けていた日本人の学生に出会い、話をすることができた。彼らは日本の未来をつくるであろう精鋭部隊に見えた。研修で一番のショックを受けた瞬間だった。どうしても今の自分と比較してしまう部分があり、何とも言えない気持ちになった。しかし、ヒロさんに人と比べても何もいいことはないと言われ、前向きな危機感に変えることができた。

以上のように、ショックをたくさん感じられる経験を積み、同世代から刺激をもらえたことで今後の自身の成長に間違いなく繋がる成果が得られた。

チーム活動での苦勞

研修で大変だったことは、チーム市役所として課題解決に向けたインタビュー活動である。異国の地で話す言葉も違う人に声をかけ、インタビューに答えてもらうことのハードルの高さにはじめは苦戦した。グループでお互いを鼓舞しあいながら、インタビューにチャレンジしていくうちに成功体験を重ね、ハードルをぐっと下げることができた。その場で答えてくれる人、持ち帰ってから答えてくれる人など様々で、アンケートの回答状況を見て回答数一つでも増えていたらうれしかった。日本でもあまりやらないことをアメリカで実行できたことは、研修の収穫といえる。また、個人的な出来事になるが、サンフランシスコのジャパントウンでおにぎりを食べている人に声を掛けたら、イタリア人の観光で来ている方だった。おにぎりから話題を膨らまし、インタビューに成功。さらに、おにぎりをつくらせて、想定していない形で軽食にありつけたこともいい思い出だ。

研修を終えて感じること

第一に研修に参加することができて本当に良かったと思う。一言で表すと「楽しかった」この言葉に尽きるが、旅行の楽しさとは別物で、正直しんどいことの方が多かった。だが、しんどいことがあれば研修参加メンバーと協力して乗り越えることができた。しんどいことでさえ、みんなで取り組めば楽しく感じた。そういった意味で「楽しかった」研修である。去年行けなくてよかったと思うほど研修メンバーに恵まれ、最高の 5 日間であった。

日常にあらゆる刺激があふれるシリコンバレー。そんな環境でもガス欠を起こすことなく活動を続けられたのは、それ以上の充実感を日々感じられたからである。シリコンバレーはまたすぐ帰ってきたいと思える場所であり、自分を何倍も成長させてくれる場所だった。

次の目標はアメリカの大学に留学することだ。研修中、語学力や異文化理解が足りないと感じ、グローバルに活躍するためにはアメリカで生活をする経験が必要なことだと認識した。

一つ一つ目標を達成できるよう、研修で得た刺激を今後の生活に存分に生かしていく。



写真 1：最高の友



写真 2：だん！

シリコンバレー研修で学んだこと

生産システム科学部 生産システム科学科 3年 野坂 蓮

1. はじめに

令和6年度産官学合同シリコンバレー研修は、8月25日から8月31日に行われた。

この研修の目的は、企業や行政が提起する課題に対してシリコンバレーという地域で企業・行政と学生が共に調査し、課題解決の糸口を模索することである。この目的を達成するために、シリコンバレーを本拠地とする企業や大学を訪問し、また起業家などあらゆる分野で活躍する分野で活動している日本人の方による講義を受けた。

この報告書では、私の研修動機を挙げたのち、この研修で挑戦したことや学んだことを述べたいと思う。

2. 研修に参加した経緯

この研修に参加しようと思った理由は2つある。まず一つ目は、生まれて一度も海外に行ったことがなかったため、行ってみたいという気持ちがあったからである。昨年度は面接で落ちてしまったため、今年こそは必ず行くという強い気持ちがあった。次に二つ目は、シリコンバレーは最先端の技術が集まる地域であるため、そこで働いている人や勉学に励んでいる人の考え方やマインドについて学べる場所が数多く存在すると考えていたからである。シリコンバレーはたくさんの起業家や投資家集まっており、多くの大企業の本社がある。この特殊な環境には多くの学びがあると考えた。

3. 研修で挑戦したこと

私が、シリコンバレー研修において挑戦したことは、今までやったことがないことや、またチャレンジしたい気持ちがあったがやることをためらっていたことに積極的に挑戦することである。中でも”人に話しかける”などコミュニケーションの面では沢山の困難があった。初めは日本とアメリカの環境の違いや、英語がうまく話せないことでこの研修を無事に終えることができるのかとても不安になった。日本とアメリカの大きな違いとして感じたのは、”スモールトーク”の有無である。アメリカでは、レジスタッフや公園を歩いている人が気軽に話しかけてくる。日本では、いきなり初対面の人に話しかけると少し変な人だと思われるしまうと私は考えており、調査のために、一般の方にアンケートを取る際もいきなり声をかけたら変な人だと思われるのではないかと大変恐怖を感じていた。だが、研修の中でせっかくアメリカにきたのなら日本での当たり前を捨てようと思うことができた。またここシリコンバレーはたくさんの最先端の技術、イノベーションが生まれる地域であり、世界で最も挑戦する人がいる街だと思う。そのためシリコンバレーの方々は失敗という概念があまりなく、すべては経験であるという話を聞き、自分もそのマインドを持とうと強く思い、行動することができた。

4. 研修で学んだこと

このシリコンバレー研修で心に残ったことは大きく2つある。一つ目は”失敗を恐れてはいけない”ということである。私はこの点において最も日本とシリコンバレーの違いを感じた。日本人は消極的な人が多くいると思う。私自身これまで極端に失敗を恐れて生きてきた。例えば、学校などではみな発表をして間違うことを恐れて手を挙げようとししない。そのような環境でこれまで生きてきてこの考えが当たり前のようになっていた。だが、シリコンバレーでは全く違って、今まで自分が持っていた考え方が世界的にみると少数派なのかもしれないと感じることができた。また、”失敗はなくすべては経験である”という言葉も心に残っている。これからの人生では、沢山の挑戦をして、沢山のまだない経験をしていきたいと思う。二つ目は人と人のつながりが大切ということである。シリコンバレーで活躍している日本人の方々にお話を聞く中で、一人の力だけでできることはとても少ないと感じた。自分の実現したいことを口に出すことやつながりを求めて自分から行動し続けることで助けてくれる人や協力してくれる人が現れること、それが大きなことを実現するうえで最も大切であると感じた。これからは人とのつながりを大切に、自分から貪欲に求めていこうと思う。



アンケートを行ったスタンフォード大学



Apple Vision Pro のデモプレイできた
Apple Visitor center

5. 最後に

今回の研修はとても充実しており、一週間と短い期間ではありましたが、沢山の刺激を感じることができました。随行職員の方々をはじめとする、大学職員の方々、小松市職員の方々、b-bridge の方々、参加企業の方々には、多大なるご尽力をいただいたことに心より感謝申し上げます。この研修は、私の人生を変えるターニングポイントになると強く感じました。大変貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

2024 年シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部生産システム科学科 3 年 橋本俊亮

・この研修に参加した動機

今回自分がシリコンバレー研修に参加した理由は、人生初の海外に行き、自分の中の世界を広げたいと思ったからだ。自分には現状、やりたいこと、なりたいものがなかったもので、日本という国を出て、さまざまな企業を見ることで自分への刺激となり、何かヒントを得られるのではないかと考えた。

・活動内容

自分は今回、JOPS という企業の方と同じ班となり、「知識と技術を持った人を会社に入社してもらうにはどうすれば良いか」というテーマについて結論を出すことを目的として活動を進めた。そのために、事前にアンケートを作成し、活動期間の間で訪れるさまざまな場所で、さまざまな人からの意見を集めました。そして、それらから得た結果をもとに、チームで意見を交換して、提案した。

・挑戦したこと

今回の研修で自分が挑戦したことは、恥じらいを捨て、自分の持っているもの全てを使って相手に自分の気持ちを考えを伝えることだ。スタンフォード大学やショッピングモール、ピア 39 など、幅広い年齢層の人に男女問わず話しかけ、インタビューを行った。

初めの方は緊張していたため、なかなかうまく言葉が出てこず、うまくインタビューを行うことができなかった。そこで、たまたま近くにいた先輩にそのことを話すと、いきなりアンケートの内容を出すのではなく、自己紹介や、日本の文化のことなど、ある程度のコミュニケーションをした後にアンケートなどを行うと、スムーズに行けるよとアドバイスをいただいた。実際にアドバイスを意識してインタビューを行うと、成功する確率が上がり、自信を持つことができるようになった。初めの方は緊張から、相手の顔なんてなかなか見れていなかったが、慣れてきた時に相手の顔を見ると、とても優しい顔で聞き取ろうと歩み寄ってくれていた。それを見て、言葉の壁があっても、感情は伝えられるんだと知り、感動した。

僕が最も印象に残ったインタビューは、スタンフォード大学で 5 人組でお酒を飲んでいる人たちに自分 1 人でインタビューをしに乗り込んで行ったインタビューだ。インタビューに慣れてきても流石に大人数だったため怖かったが、結果は大成功。その成功が研修内で最も嬉しかったことであり、達成感を感じることができたものだ。



・学んだこと

今回の研修では、アメリカで働くさまざまな人から話を伺うことができた。その中で最も興味を持った話は、アメリカで働く人は実力主義で2年に一回ぐらいは普通に転職するというものだ。自分にとって就職する会社というのは終身雇用を前提としたものとして考えていたため、全くの逆の考え方に衝撃を受けた。就職活動を目前に控えた自分からすれば、こんなにしんどいことを短いスパンで何度も行うなんて想像できなかったからだ。でもそれがアメリカで働く人にとっては普通で、自分の知識と技術をレベルアップさせるための行動なのだ。その話を聞いて、自分はアメリカで働くことは不可能だと思った。何度も就活をすることもそうだが、完全なる実力主義でその会社に存在価値があるかを見られる。それを乗り越えられる自信を持つことが無理だと思ったからだ。しかし、それをかっこいいとも思った。

今すぐアメリカに行くようなものすごく大きなことはできなくても、自信を持てるように自分の知識と技術を高めればいいんだと思い、今後その姿勢を貫いて生活していこうと思う。

・終わりに

シリコンバレー研修は自分の人生にとって、ものすごく大きな刺激になった。今回の研修のおかげで今後自分の将来を考えたときに、より多くの視点から物事を考え、判断できるようになったと思う。自分の知らない世界や考え方を知ることは本当に大事であり、有意義であることが改めて分かったので、今後、シリコンバレー研修のような機会があったら、逃さないようにしたい。

シリコンバレー研修

生産システム科学部 生産システム科学科 3年 藤森 遥陽

1. はじめに

2024年の産官学合同シリコンバレー研修に参加した理由は、私は大学の授業などで単位もあまり取れていない状態でそんな自分を変えたいという思いで参加しました。海外でしか受けられないような貴重な刺激を受け、この先の自分に繋ぎ、社会に出て必要とされる人材になりたいという意思のもと、研修に励みました。

2. グループの研修の内容

まず、私はJOPSの藤井果奈子さんのグループに配属となり、事前に課題を持って研修に臨んだ。課題の内容としては、「知識と技術をもった人に入社してもらうためには、どうすればよいか？」というものだ。その課題の解決案を出すために色々な試行錯誤をした。内容としては、海外の方への街頭インタビューを行い、それをもとにアンケートの結果をまとめ、考察して解決策へと導いた。アンケートでは、話しかけても現地の人に意味が通じない、会話ができないなどがあったがその都度修正を行いQRコードを読み取ってもらうという案の元アンケートを行った。その結果上手くいき、アンケートを取ることができた。グループでの活動は、1人だけでしているわけではないので全員でしっかりと課題解決に向かっていけたのでとてもいい経験になった。

3. 活動を行った場所

AppleやGoogleといった誰もが聞いたことある企業だけでなくソディックやIntelなども行きとてもよい刺激を受けることができた。



4. 研修中に学んだこと

研修で学んだことの中で一番印象に残ったことは、アメリカは個人の成長意欲がとても強いことと、どの企業も実力主義で従業員が使えなかったらすぐクビにするというものだった。まず個人の成長意欲の強さは日本ではあまり見られないもので、転職する理由も驚いたものだった。日本では対人関係が要因であったり、給料の賃金の問題であったりがあるもののアメリカでは自身のスキルアップのためや新しいことに挑戦したいなどのとても前向きなものであった。これを聞き私は、自分自身の限界を自分で決めずに突き進む姿勢というものはとても感銘を受けた。今まで私は、課題やテストにおいても分からないからといって投げ出したりし、自分の限界を自分で決めていたが、その姿勢を忘れずにもっと成長していこうと思った。日本では大学を卒業していたら採用してもらえらる企業があり、明日クビになるなどのこともない。だから、仕事をそつなく割り振られた分だけをするのではなくどんどん新しい事を取り入れてスキルアップをしていき限界を決めずに頑張りたいと思う。日本ではあまり見られないような機械や企業の形態もあり自分自身にとってもよい刺激を受けることができたのでこの研修はとても有意義なものになった。

5. 研修を終えての今後の目標

私の今後の目標は、まず第一に大学の授業に対してもっと本気で学んでいこうと思った。そつなくこなして単位を取って卒業ではなく、今まで以上に本気で授業に臨みどんどん知識を取り込んでいきたいと思う。私は父が機械系の会社を経営しているので、その会社を継ぐだけでなくさらに大きくしていきたいと思う。そのために機械だけの知識がある人間ではなく、AI や情報、電気といったさまざまな知識をもったエンジニアになり日本だけでなく世界などで活躍していきたいという目標ができた。その目標に向かって、色んなことに疑問を持ち知識を取り入れていきたいと思った。

6. 終わりに

この研修を通じて自分自身にとっても良い刺激を受けれたと感じた。日本では体験できないようなことがシリコンバレーでは体験でき、それを直に感じ取れたので良かったと思った。文化も食事も違うことでさらに日本との違いを感じ取ることができたのでその点も良い経験ができた。これから先も、この経験を忘れることは無いと思う、そしてもっと成長していき来年もこの研修に参加できれば良いと思う。研修に援助してくださった企業や小松市、大学のためにも今後どんどん自分を磨いていきたい。

シリコンバレー研修を終えて

生産システム科学部 生産システム科学科 4年 豊田貴大

1. 研修に参加した動機

私が今回のシリコンバレー研修に参加しようと考えた理由は大きく2つある。

1つ目は、様々なキャリアの可能性や魅力を実感して、自分の将来のビジョンを考え直すきっかけにしたいと思ったからである。私自身、すでに地元企業への内定が確定している状況ではあったが、「企業で働く」ということに対して具体的なイメージを持つことが出来ていなかった。そのため、シリコンバレーで働く人たちがどのような考えを持って働いているのか知りたく、今回の研修に参加した。

2つ目は、自分の英語力の無さに危機感を持たせるためである。私は将来、世界で活躍できるような人材になりたいと考えていたものの、なかなか英語力の向上に力を入れることが出来ていなかった。そこで、英語を話さなければならない状況に身を置くことで、自分の英語力のレベルを自覚させると共に、自分の英語学習への火付け剤にしたいと思いシリコンバレーへ行くことに決めた。

2. 現地での学び

ここでは、私がシリコンバレーで特に印象に残った3つのことについて紹介する。

①日本とアメリカの仕事の違い

まず、日本とアメリカの給料の差にとっても驚いた。現地の企業（Door Dash）で働く原さんの初めのプレゼン画面で出された「2800万円」という数字。これは、現地の新卒社員が貰う平均的な年収だという。その分、現地での生活費が高いとのことであったが、日本の新卒の平均年収が約240~300万ということを考えると、夢のありすぎる話だった。

次に、雇用形態の違いが働き方に大きな影響を与えていると感じた。日本の雇用形態として終身雇用や年功賃金などが挙げられる。対してアメリカは、能力が全てであり年齢や国籍、性別などは関係がない。ただし、会社にとって必要がないと判断されれば、次の日にでも解雇されるという状況だった。日本とアメリカでは雇用形態が異なるため、一概にどちらが良いとは言えないが、いつ解雇されてもおかしくないという危機感を常に持って働いていることが、シリコンバレーが世界の最先端を走る1つの要因であると思った。

また、世界に向けてより良いプロダクトを生み出す上で、熱意を持った多様な人材が必要だと感じた。シリコンバレーには異なる考え方を持った様々な人種の方たちがいる。しかし、モノの見方や考え方の違いを互いに認め合って協力することで、想像を超えるモノが出来ると思う。シリコンバレーは、世界1のプロダクトを作ろうと野望を持った世界1流プレイヤーが世界各国から集まる場所だ。だからこそシリコンバレーからは常に最高のプロダクトが生まれ続けているのだと思う。



シリコンバレーでの働き方について詳しく教えてくださった原さん（左）、吉田さん（右）

②コミュニケーションは言語だけじゃない

今回の研修では、何度も現地の人に自分から話しかけに行った。そのたびに自分の英語力の無さをこれでもかという程に痛感した。しかし、笑顔で話しかけ、ジェスチャーなどで一生懸命に伝えようとする、相手は理解しようと真摯に向き合ってくれた。この経験から、伝えようと熱意をもってコミュニケーションすることこそが最も重要だと感じた。



コミュニケーションに真摯に向き合ってくれた現地の方々

③ とりあえずやってみる

「とりあえずやってみる」これは私が今回の研修で最も重要だと感じたことだ。

今までの自分は、やりたいことがあっても失敗することが怖くて最初の一步がなかなか踏み出せなかった。しかし、事前研修のヒロさんの講義で何事にも Proactive に行動することの大切さを学び、今回の研修では何事にも挑戦し続けた。結果としては、成功より失敗した方が多かったと思う。だが、失敗からたくさんのことを学ぶことが出来た。この学びは、とりあえずやってみたことで得られた成果であり、自分をより成長させてくれた。最初の一步を踏み出すのはとても勇気がいることだ。しかし、踏み出したことで得られるものはとても大きなものだと思う。だからこれからは、何事に対しても「とりあえずやってみる」を大切にしていこうと思う。



ヒロさんによるレクチャー

3. まとめ

今回の研修を通して、働き方や文化の違いについて多くの学びを得ることが出来た。また、シリコンバレーの方々の「世界一のプロダクトを作ろう」という情熱を持って働く姿に強い憧れを持った。今はまだ技術力も英語力も乏しいが、自分の希少性を磨き、観光ではなくエンジニアとしてシリコンバレーの地で挑戦できる人になる。

4. 最後に

事前研修でお世話になった岸本さん、シリコンバレーで多くの気づきを与えてくださったヒロさんをはじめとする B-Bridge の方々、また小松市役所、企業、大学の職員の方々と学部生の皆様のおかげでとても楽しく、有意義な時間を過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部 生産システム科学科 4年 東出健吾

1. 研修に参加した動機

今回の研修に参加した動機は主に2つある。1つ目は、積極的に行動し、海外の考え方や今まで見たことのない新たな世界を見ることで、広い視野を身に着けること。2つ目は、私はもともと英語に対して苦手意識があったため、今回の研修で海外の人々と会話することで、少しでも英語の楽しさを味わい苦手意識を克服することで、今後のキャリアに活かしていきたいと思った。この2つの理由が今回の研修に参加した動機である。

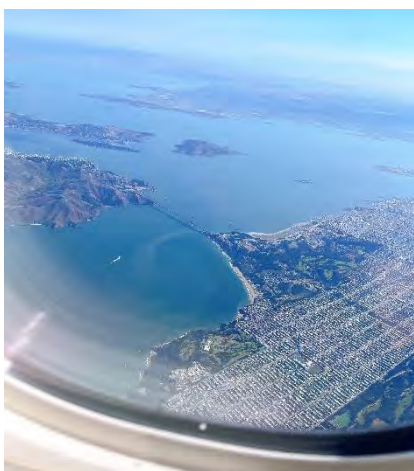


図1 飛行機から見た景色



図2 ホテルでの集合写真

2. 活動内容

私はJOPS（日本オープンシステムズ）グループに所属し、「知識と技術を持った人を会社に入社してもらうにはどうすればよいか？」という課題を解決するために調査を行った。具体的には、シリコンバレー周辺の公園や観光地で Forms によるアンケートを実施し、その結果からこの課題の解決策を提案した。

3. シリコンバレー現地での研修について

1) グループでの活動

グループで行動した活動についてまとめる。初日に夕方からグループで今後の活動を話し、まず現地の人と会話してみようと思い、ホテルの近くにあるパナマ公園に行った。初めて海外の人としゃべるので戸惑いがあったが、数人に声をかけた。しかし、質問に対して対応するような答えが返ってこず、質問を見直す必要があると感じた。その日の夜に、グループで集まり、スムーズに会話ができるようにするために、質問の修正とQRコードを用いた Forms を作成した。8月27日の午後にスタンフォ

ード大学を訪れ、私は別の要件があったため、すぐに帰ったが、グループメンバーは残り、学生に質問を行ってくれた。しかし、そもそも学生が少なかったりし、思うようにアンケート結果を得られなかった。8月28日はサンフランシスコ市内に移動し、アンケート調査を行った。まず、サニーバール駅からサンフランシスコに行くまでの電車の中で調査を行った。私はリーダーだったため、自分がまずは率先して、行動しようと思い、外国人の方に声をかけた。日本語を勉強している方で、少し日本語が話すことができいて、とても楽しく会話をする事ができた。お話の後に写真を撮ってもらった。グループメンバーも続々と声をかけに行って、良いスタートダッシュを切れた。次に Pire39、Japan town で調査を行ったが、観光客が多かったこともあり、中々、アンケートに解答してくれなかった。この時点でアンケートの回答数がとても少なかったのも、まずいと思い、San Francisco Centre という現地の人が集まりそうなショッピングモールに行き、アンケート調査を行った。この結果、たくさんアンケートに回答してもらうことができた。QRコードを読み込む際に断れることもあり、QRコードを見せずにアンケートを答えてもらう、方式なども取りながら調査を行った。この調査で最終的には25人の方からアンケートを回答してもらうことができた。この結果を受けて、最終発表を PowerPoint や Excel を用いてまとめた。



図3 電車で話した方との写真①



図4 電車で話した方との写真②



図5 電車で話した方との写真③

2) 個人での活動

初日の夕方に、グループでホテル近くのパナマ公園にアンケート調査を行ったが、初めてしゃべった外国人の方が、中国人の方で、中々、思うように意見を聞き出せなかった。また、もう1人しゃべったが、私が就職先を探しているみたいだと勘違いをされ、これも思うような意見を聞き出せなかった。この経験で、少し気持ちが落ち込んだ。次の日に、ワゴン車で移動する際に現地の B-Bridge に務めるタカさんに「失敗も経験の1つ。やらないと何も始まらないし、やって失敗するのと、やらずに失敗するのではやって失敗する方が得られるものが大きい。」というようなことを言われ、自身の中に火が付いた。その日の夕方に、1人でレイナー公園に行き、20人の外国人の方にしゃべりかけて、アンケート調査を行った。アンケートに答えてくれたのは20人中3人だったが、挑戦する中でどうやったら答えてくれるのかなど、試行錯誤できたので良かった。アメリカ人だけでなく、インディアンの人や、スペイン人、アジア系の方など様々な人としゃべれた。日本語を少し話せる方がいて、アニメの話などをして盛上れたので、とてもいい経験ができた。これだけたくさんの方々と会話をして思ったことは、英語は完璧にしゃべることができなくても、笑顔とボディランゲージがあれば、通じ合うことができるということだ。伝えようとする思いや感情が表情や体で表現できれば、たとえ国や言語が違ってもしっかり合える、その喜びを知ることができて良かった。

3) 講義から学んだこと

Door Dash の原健太さんの講義を受けて、印象に残っていることが2つある。1つ目は、日本とアメリカの仕事の違いである。日本では、1つの会社に入ったら、終身雇用、年功序列と、安定しているが、アメリカは結果を残さないと明日クビになるかもしれないという状態で仕事をするので人材の流動性が高く、転職も多いとわかった。2つ目は、100万人に1人の希少な存在になることが大切ということだ。そのため、他の人にはないスキルや取り組みをする必要があり、トレンドではないものにも目を向けることが大切である。また、脳裏に自分が息をするようにできることのアンテナを張っておくことで、情熱をささげるものに携わる。これは、お金にならなくても自分の直感を信じてやると良い。好きなことを見つけて、深掘りする際には、動詞でとらえることも大切である。例えば、野球をやるのが好きなのか、見るのが好きなのか、自分を知ること、新しい取り組みができる。

Meta の吉田さんの話を聞いて、印象に残っていることは、元々興味のあるものに色々目を向けておいて、信念や思いがあるものに深くついこむことが大切であると学んだ。また、自分を知ること大切であることや、知識をつけることで、自信も持つことができ、色々な応用ができることも学んだ。

B-Bridge のヒロさんやタカさんからは、とにかくやることが大切であるということ、積極的に挑戦する。今回の研修で、とにかく一歩踏み出すことの大切さを

実感した。やることで見えてくる、なぜうまくいかなかったのか、なぜうまくいったのかなどを考えることで、失敗も糧にして次のステップにつながる。これが、新しい自分に成長していくために必要不可欠なものだと学んだ。

B-Bridge のミワさんからは、できる、できないではなく、常にできる道を探ることが大切であると学んだ。障壁が立ちはだかった時に、どうしたらよいか、思考することで、できないこともできるかもしれないと今後の挑戦への捉え方が変わった。



図6 原さんの講義



図7 ヒロさんの講義

4. まとめ

今回の研修では、様々な学びがあった。自分を変えたい方や挑戦することに抵抗がある方、新しい刺激が欲しい方など、公立小松大学の皆様、この研修ではたくさんのことを学べるので、絶対に行く価値はあると思う。ぜひ挑戦してみてください。私は今後社会人として働くので、この経験を活かして、世界で活躍できるような人材になる。そして、小松市の発展に貢献していく。

5. 最後に

ヒロさんをはじめとするシリコンバレーの方々、事前研修でお世話になった岸本先生、香川先生・山本さんをはじめとする大学職員の皆様、企業・小松市役所の皆様、このプロジェクトと一緒に研鑽し合った学部生の皆様、心より感謝申し上げます。貴重な経験、本当にありがとうございました。

シリコンバレー研修を終えて

保健医療学部臨床工学科1年 有澤愛純

研修に参加した理由

私が参加しようと思った理由は、海外の人と話してみたいという好奇心と1年生の内に積極性を身に着けて、新たな考え方や価値観を知っていきたいと思ったからだ。私は将来、病院で働くことを考えているため、アメリカで様々な考え方や価値観を知り、患者の気持ちを受け入れられるような人間になりたいと思った。また、中学生の時、家族でアメリカへ行った際に、スーパーやホテルで話しかけられたが、勇気がなく全く話すことができなかった。今までも勇気や積極性がなく、一歩踏み出すことができなかったため、今までの自分を変えて、なりたい自分へ成長していくためにこの研修に参加した。

課題解決に向けて

私たちは、市役所から「小松市を魅力的な街にしよう」というテーマのもと、現地の広報戦略や現地行政のまちづくりを学び、小松市に新しいアイデアを提案するという課題があった。調査方法としてはサンフランシスコ日本国総領事館の黒岩様から現地のまちづくりについて聞き取りを行うことと事前に現地の行政の広報戦略やまちづくりについてのアンケートを作成し、現地の方に声をかけてアンケートを依頼して回答してもらうこと



図1 ホテルでのインタビュー

の2つを行った。1日目はミーティングが終わった後に、インタビューをするときにどうやって話しかければいいか美和さんに相談したところ、ホテルでインタビューをする場合はどこから来たか質問するとそこから話が広がると教えてもらった。そして、美和さんに「じゃあ今そこのプールにいる人に話しかけてきたら？」ときっかけをもらって、チームの3人で話しかけに行った。最初は自分の英語が伝わるか不安で、断られたらどうしようと思っていたが、話しかけると明るく接してくれて、もし自分の英語が伝わらなくても言い換えたり、ジェスチャーをしたりすることで伝わるということが分かった。一度話しかけたことで勇気を持ち、いろんな人に自分から話しかけられるようになった。2日目は朝5時に起き、他のグループのメンバーも含めて近くの公園へ行き、インタビューを行った。どうしたらインタビューに答えてくれるか考え、その公園にいる人と一緒に歩いた



図 2 黒岩さんとの対談

り、犬と一緒に遊んだりしながら行政やまちづくりについての質問をし、とても楽しかった。3 日目は Sodick へ企業訪問した際に、働いているアメリカの方へ仕事についての質問や行政サービスについての質問をした。スタンフォード大学へ行く前、グループで同じ大学生だから、ほかの人と比べてアンケートに協力してくれるかもしれないと話していたので、スタンフォード大学内

ではより頑張って声掛けを行った。同じグループの先輩の提案で、日本のお菓子と一緒にアンケート渡すと話の話題にもなって、興味を持ってアンケートの話を聞いてくれた。4 日目はサンフランシスコのジャパントウンで、サンフランシスコの市民サービスで気になっていた LGBTQ についてのインタビューを行い、日本とは全く違う視点や価値観を持った人の話を聞けて、とても楽しかったし、面白かった。サンフランシスコ日本領事館の黒岩さんのお話では、日本とサンフランシスコの文化、教育の違いを深く知ることができた。

2 日目にヒロさんと美和さんをお願いして、Kaiser Permanente という病院に連れて行ってもらった。日本とは違ってアメリカは様々なアート作品を置くことが義務になっているそうで、病院内は日本より明るい印象だった。その病院はスマホで診察を済ませることができたり、出産した次の日に退院しなければいけなかったり、いろんな医療従事者の写真と説明があらゆるところに飾ってあったりなど、日本とは違いところが多く驚くものばかりだった。最終日は、研修のメンバーでスーパーマーケットへお土産を買いに行き、研修であったいろんな話を共有してとても楽しかった。



図 3 病院見学



図 4 最終日の自由時間

まとめ

私がこの研修で得たことは恥じらいを捨てることと失敗を成功に活かすということだ。研修で一番大変だったことはインタビューをしてアンケートに答えてもらうことだった。前までは断られるのが怖くて、知らない人に話しかけるなんてできなかったが、意外とやさしく答えてくれるし、断られてもそこから話し方を変えてみようなど成功するためにいろんなことを考えることができた。アンケートの内容で少しトラブルが起きたこともあったため、インタビューはとてもしんどかったが、研修内で1番良い経験と学びになった。また、学部や学年の違うメンバーとも出会えて、そこからたくさんの刺激をもらうことができた。この貴重な経験を学生のうちにできてよかったと思う。

1.動機

私がこの研修に参加した動機は、たった一つ。「自分改革」であった。私は、人とコミュニケーションをとることを得意だと思っていた。しかしそれは、日本人で、同じ日本語が話せるからだ。実際、私は日本国内で外国人の方を見ると、どこか無意識に壁をつくっていた。「言葉が通じない」、「肌の色が違う」、そんな偏見、固い考え方を持っていた。そのような考え、壁を取っ払い、「自分改革」を行うべく、この研修に参加した。また、この研修で多くの方の話を伺うことで、考え方の幅を広げ、就職した際に様々な角度で考えることができる自分になるための「自分改革」を行うためでもある。

このシリコンバレー研修で自分の殻を破り、世界的にも認められる人を目指し、研修に臨んだ。

2.個人活動

私は、この研修でグループでの活動とともに、個人の成長のための活動も行ってきた。それは、シリコンバレーで働く日本人の方にお話を伺うことだ。まず、本格的に研修がスタートした2日目に、オリンパスなどで勤務されていた経歴を持つ周佐様、TERUMOで現在も勤務されている矢崎様にお話を伺った。そこで伺ったお話は、自分がこれから携わっていくであろう医療機器についてである。どうして日本では医療機器の開発が進んでいないのか、なぜシリコンバレーでは医療機器開発が盛んなのかなどを伺った。日本とシリコンバレーで医療機器開発において違いが出る理由として、「日本人のマインド」、「投資家の数」があるのではないかといった意見をお聞きした。日本人はよく言われる場面が多いが、「失敗を恐れる」人が多いのが国民性としてある。そのマインドでは開発は行えない。対してシリコンバレーでは、失敗を恐れず積極的にチャレンジしていく。言葉にすると非常に簡単のように思えるが、かなり大きな「差」であると感じた。また環境面でも、投資家が少ないがために、スタートアップがあまり立ち上がらないことも背景にあるのではないかという意見も頂戴した。私はこのお話を聞き、日本は技術的に未熟というより、もっと根本的なところに問題があるのだと気づかされた。

また、3日目には医療機器のマーケティングをされている久保様にお話を伺った。この対談では、キャリアの考え方を主に学ぶことができた。自分が将来どうなりたいのか、どれぐらい稼ぎたいのかなどをより具体的に考えることで、後悔することのないキャリアを選ぶことができ、そのために必要な努力をモチベーション高く行うことができることを教えていただいた。

また、同日にこの大学の特任教授である Hiro さんとも対談し、帰国後のマインドセットや、どういったことがこれからの日常生活に生かせるかなど、アドバイスをいただいた。

今回の研修で積極的にいろんな方々にお話を伺ったことで、多くの新たな意見、考え方を得ることができ、刺激をいただいた。この経験は間違いなくこれからのキャリアで生かせるだろう。

3. グループ活動

私のグループは小松市の抱える問題を解決するための策を考えるために研修で様々な情報収集を行った。

まず行った活動の一つ目はアンケート調査だ。右の写真のアンケートを研修中に現地の方に配って答えてもらった。このアンケート調査を行っている段階で、質問内容と自分たちが出したい結論の内容が乖離しており、質問内容を研修の途中に変更した。この経験から、事前の準備からしっかりと取り組まなければいけないことを学んだ。この学びは個人としても、グループとしても大きな経験となった。



活動の二つ目は在サンフランシスコ日本国総領事館で勤務されている黒岩様にお話を伺った。黒岩様との対談では、日本とカリフォルニア州の行政の違い、行政の在り方、そして私たちが調査しているテーマの小松市の活性化を図るための策を考える上でのヒントをいただいた。カリフォルニア州では、中央省庁で直接行政サービスを提供していたり、水道サービスに関しては半官半民で行っているなど、自治体がサービスを提供しない、自治体に頼らないのが最大の日本との違いである。そして、黒岩様のお話の中で行政は民族や思想に基づいて行うのがベストであるということを教えていただいた。これは帰国後に問題の解決策を考えるうえで非常に重要なことを学んだ。最後に、アメリカでは資金調達が発達しており、資



金のサイクルをつくることで、資金を安定して獲得し、それをもとに様々な活動をしている。このお話を聞き、この観点は解決策に生かせるのではと考えた。

グループ活動においても、さまざまな試行錯誤を繰り返し、課題解決に向けて活動を行ったことで、課題解決をするうえで考慮すべき点、いろんな方にお話を伺うことの大切さを学ぶことができた。

4.まとめ

外国に住んでいる方に話しかけることに非常に抵抗があったり、不安があったりしたが、実際に会話してみると、とても気さくに話してくれたり、笑顔で話してくれる方が多く、日本人よりも親しみやすい印象を受け、会話のスキルが日本人とは大きく差があると感じた。自分はまだまだ会話の時の話しやすい雰囲気の作り方などが未熟だと感じたので、帰国後も様々な人と会話をして、会話のスキルを身に付けていきたい。また、グローバルで活躍できる人材になるのが自分の目標の一つであるため、もっと英会話をもっと練習していきたい。

5.感謝の言葉

今回の研修を行うにあたって、研修の企画、進行を行ってくださった Hiro さん、研修費などの助成を行ってくださった公立小松大学、小松市の皆様、引率を行ってくださった企業の方々、山本さん、香川先生、Miwa さん、Taka さん、そして研修でお話を聞かせてくださった方々等、この研修にかかわってくださった皆様のおかげで、素晴らしい経験をすることができました。本当にありがとうございました。また、研修中にお互いに刺激しあい、高めあったメンバーの皆さんにも感謝を申し上げます。ありがとうございました。

シリコンバレー研修参加報告

保健医療学部臨床工学科 1 年 齋田悠夏

1. 研修に参加した理由

私が今回の研修に申し込んだとき、「アメリカに行ってみたい」というただの好奇心が一番大きかった。漠然と臨床工学技士になりたいとだけ思っていた私は、大学に入りこれからのことについて悩んでいたため、「自分の興味を持つものを知る」ことを目標に今回の研修に参加することを決めた。

2. グループ活動報告

研修ではグループごとに与えられた企業課題を解決するために活動を行った。私のグループの課題は「知識と技術を持った人に入社してもらうにはどうすればよいか」であり、解決するためにシリコンバレーでのインタビュー調査を進めた。対象は新卒入社を考えている学生と、社会人の転職といった二つのグループに分けて意見の収集を図った。活動は主に企業訪問と街頭での聞き込み調査の二つに分けられる。

I 企業訪問

<ソディックアメリカ>

事前研修でも加賀にあるソディックを見学し、普段目にするののできない工場や考え抜かれた技術を知ることができたため、ソディックアメリカへの訪問は今回の研修の中でも特に楽しみにしていた活動であった。映像解析や細かい製造技術について英語で話を聞いた。その後、現地で働くエンジニアの方と個人的に会話をし、仕事を選ぶ際に大切にしていることなどをうかがった。1度ソディックアメリカを離れて、別の企業で働いてからからもう一度戻ってきたという話を聞き、転職活動の柔軟さや自分の求めることにまっすぐな姿勢を感じることができた。



図 1 システムについて話を聞く様子

<intel>

2 日目に訪問したインテルでは、エンジニアとして働くピーターさんに話を聞いた。「転職に対するイメージや仕事を選ぶ上で大切なことを調べている」と尋ねると「ちょうど転職をしたところだよ」と自身の詳しい話を聞かせてくれた。また、仕事を選ぶ際に自分の希望するポイントすべてを大切にする、妥協をしない姿勢を持っているとわかり、日本よりも転職に対してオープンな雰囲気があるのではないかと私の考えを広げることができた。



図 2 intel 前にて

<Rakuten>

3 日目には楽天のオフィスを見学した。ここでは、私の「会社」というものに対するイメージをすべて壊すような経験ができた。会社では学校の職員室のように、全員が同じ机に同じ PC を置いて淡々と作業を行っているのかと考えていた。しかし、フロアに同じ机と PC がずらりと並べてあるものの、別に個別の会議室が数多く用意されていたり、机は高さが調節可能になっていて、立って作業をしている人や、独特な椅子を使用している人も見られたりした。さらに驚いたことは、充実したリフレッシュスペースである。お菓子や飲み物が常備されていることはもちろん、アイスクリームコーナーや広々としたゲームコーナー、社員食堂も広く、メニューが充実していることが印象的だった。



図 3 充実した社員食堂

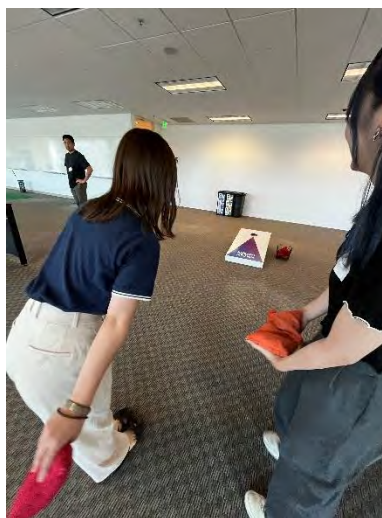


図 4 オフィス内のゲームコーナー

その後、残業などはほとんどせず、限られた時間内で新しいものを作り上げられていくというアメリカでの働き方を聞き、自由で福利厚生が整った環境だからこそ実現できる働き方かもしれないと考えた。



図 5 楽天にて話を聞く様子

II 街頭調査

私たちは、学生向け・社会人向けと二種類のアンケートを作成し、はじめは近所の公園でインタビューを開始した。勇気を出して声をかけても、テンプレートの文章しか話せない自分のがっかりしたが、ジェスチャーや自分のわかる簡単な英語を組み合わせることで、何とか数人から意見をもらうことができた。

スタンフォード大学での調査では、まず小松大学とは比べ物にならないほどのキャンパスのスケールに驚いた。夏休み期間の訪問だったことで、学生数は少なかったものの、テラスなどで勉強をしている学生も見かけ、その学びに対する情熱を感じ、私もやる気をもらった。学生のほかにも観光客や地域の方に話を聞かせてもらうことができた。出会った方々は皆フレンドリーで、「日本の大学生で、調査を行っている」と話しかけると、最後まで話を聞いて協力してくれる人が多かった。



図 6 キャンパス内でのインタビューの様子



図 7 奥まで広く続くスタンフォード大学キャンパス

ピア 39 ではお土産物屋さんやアトラクションのオペレーターとして働いている方に話を聞いた。毎日たくさんの観光客が訪れるからか、私のつたない英語力でも理解しようとしてくれたり、わからないことは質問してくれたりとやさしさに助けられる場面が多かった。

3. 病院訪問

私の夢は臨床工学技士になることであるため、経験として海外の病院を見てみたいと思い、病院に訪問した。大まかなつくりは日本の大きな病院と変わらず、専門診療科ごとにブースが分かれている構造であった。調剤室を見学した際に、日本の病院よりも市販薬と呼ばれる薬の種類が充実していることに気づいた。これはアメリカの「あまり病院に受診しない」文化が大きく反映されているのかと

考えた。また、病院における日本と大きく異なる点として、看護師など病院に勤める方たちが、制服のまま出退勤していることである。中には帽子までかぶったまま駐車場を歩いている看護師さんも見かけ、アメリカの自由さを体感した出来事であった。

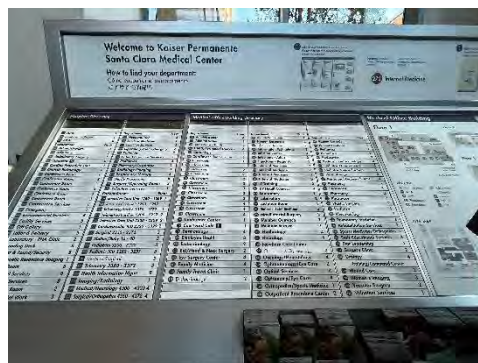


図 8 訪問したメディカルセンターの案内図



図 9 病院内の調剤室の様子

ともとても興味深く、楽しい経験であった。

今回は特別なアポイントメントをとったわけではなかったため、実際に病院で働いている人に話を聞くことなどはできなかった。少し心残りな部分ではあるが、自分たちの力のみで日本との違いを見つけながら見学していくこ

4. 学んだこと

この研修を通して私が学んだことは、積極性が大切であるということである。当たり前のことのように聞こえるかもしれないし、実際に私自身も研修に参加する前から分かっていたつもりであった。しかし、初めて訪れる場所、さらに言語が通じるかも

わからない環境で過ごしていると、受け身では何も始まらないということに気づき、自分から人に話しかけたりすることが多くなった。私はなるべく翻訳機は使わないようにしていたため、文法は間違っていたかもしれないが、現地の方に言いたいことが伝わり、コミュニケーションをとることができた経験は、私にとって積極性は無駄にはならないという大きな勇気を与えてくれた機会となった。

5. これからの目標

今回の研修で、生まれて初めてのアメリカを訪問したことはもちろん、普段かかわりのなかった大学の先輩方とグループ活動で問題解決を目指したことはとても良い経験となった。研修中には、先輩方とも夜遅くまで納得のいくまで話し合いを続けたこともあった。そのような経験や今回の研修で学んだことを生かし、今後は積極性をもって大学生活を送りたいと考える。サークル活動やボランティア活動など、講義以外の活動に今までよりさらに頻繁に参加し、たくさんの人とかかわりを持つことでこれからも学びを広げていく。

もう一つの目標は英語力を伸ばすことである。実際に海外で自分の英語が通じた今回の経験から、今までの私の英語学習は無駄ではなかったのだと気づかされた。また、アメリカの人だけではなく、そのほかの国から旅行でやってきた人とも英語ではコミュニケーションをとることができた。研修中に会ったヨーロッパから来たという女の子と友達になれたのも英語が通じたからである。お互いに英語がわからないと言いながら会話したことが、「周りにいる人全員が完璧な英語を話しているわけではない」と自信につながった。

6. さいごに

今回の研修でたくさんの気づきを得ることができた。普段の生活ではできない経験の連続の1週間で、シリコンバレー研修に参加してよかったと心から感じた。そして、このような機会を作ってくださったすべての方、アメリカで出会った方々に感謝申し上げます。

1. 参加目的

私が今回の研修に参加した目的は、多くの人とコミュニケーションをとることだ。今回の研修では、学年・学科が違う人が多く参加し、共に行動する。そのうえ、現地の人々ともコミュニケーションをとることが必要だ。しかし私は、自分から話しかけに行くことが苦手である。なので、はじめましての人に自分から積極的に声をかけ、多くの人とコミュニケーションをとりたい。また、学年・学科、国籍など異なる様々な人とコミュニケーションをとることで異なる考えや、日本とアメリカとの違いに触れ、視野を広げたいと考え参加を希望した。

2. 現地での活動

1) グループでの活動

私たちのグループは「知識と技術を持った人に入社してもらうためには、どうすればよいか？」という課題を持って、行動した。課題を解決するために、質問を3つ考え、Forms でアンケートを作成し、公園や電車内、ショッピングモールなどでアンケートを実施した。アンケートを実施するためには、町の人に話しかけられなければならない。私は英語が得意なわけではないので会話をするのはとても大変だった。挨拶や質問は決まっている文章を言えば良いが、問題はリスニングだった。人それぞれ話し方にも癖があり、聞き取るのが難しかった。しかし、現地の人とはとても優しく分かるまで何度も話してくれ、身振り手振りや翻訳機能などを用いて教えてくれた。それに、私のたどたどしい英語も身振り手振りを用いて伝わりなんとか会話することができた。断られることも多かったがたくさんの人とコミュニケーションをとることができた。英語がしっかり話せなくても、伝えようとする気持ちと身振りや手振り、また現地の人フレンドリーさや優しさのおかげでなんとかなることを実感した。集めたアンケートは結果をまとめてグループのメンバーでパワーポイントにまとめて最終日に発表した。



図1：現地の人と会話する様子



図2：グループ発表の様子

2) 個人での活動

私が今回の研修に参加して一番良かったと感じたことは医療機器のビジネスに関わるお三方とお話できたことだ。私は将来、臨床工学技士になりたいと考えている。なので、医療機器に携わる方々のお話を聞くことができる良い機会だと考え、他にお話を聞きたい人達と一緒にアポイントメントをとってお三方にお話を聞くことにした。お三方のお話はとても面白く、興味深いものばかりだった。現在の医療機器開発の現状や日本とアメリカのスタートアップの違い、日本とアメリカの臨床工学技士の仕事内容や資格の違いなどインターネットで調べてもなかなか分からないようなことや、現地で働いているからこそその知識や意見、考え方など様々なお話をしてくださった。どのお話も私の視野が広がるお話ばかりだった。その中でも特に印象に残っているお話が2つある。1つ目はリーダーシップについてのお話だ。自分自身の得意不得意を理解し、相手の大事にしていることを見つけて、人をどう気持ちよく動かすかがリーダーシップだと考える、という意見だった。私はリーダーシップとは人を引き付け、人々をまとめる力のようなものだと考えていた。だから、リーダーシップは誰でも持っているものではない、自分にはないものであると考えていた。しかし、このお話を聞いて誰でも持つことができるものであると気づいた。人をまとめることは人を動かすことと一緒に。人の動かし方には上手い下手、得意不得意はあるだろうが、言い方次第でリーダーシップという言葉がこんなにも身近なものに感じることができると思わずとても衝撃を受けたのをはつきりと覚えている。2つ目は、転職についてのお話だ。日本では終身雇用制度や年功序列、新卒一括採用などから転職と聞くとマイナスイメージがあるが、アメリカで転職は当たり前だ。アメリカの転職は自分のキャリアアップのため、より好待遇な環境のため、新しいこと学び、始めるためなどで転職する人が多いことを聞いた。自分が仕事に何を求めているのか、何を大事にしたいのかによって自分の未来を考え、その未来に進むための近道を探す。その中で転職するという選択肢を持っていることが重要であることを感じた。今まで私は転職に対して良い印象がなかったが、実際に転職をするかしないかは置いといても選択肢の中に転職があるかないかは今後の考え方に大きく影響するだろう。たくさんのお話を聞いて、今まで自分にはなかった考え方や知識を吸収することができ、素晴らしい経験をすることができたと感じる。

3. まとめ

私は、今回の研修で初めて話す一緒にこの研修に参加した人や日本語の通じない現地の人、現地で働く日本人など様々な人とコミュニケーションをとることができた。研修に参加した人達とは仲良くなることができた。現地の人達ともつたない英語でも身振り手振りなどを用いて会話をすることができた。現地で働く日本人の方々には自分

では考えられないような意見にたくさん気づかせていただいた。参加目的である多くの人とコミュニケーションをとることができた。そして、自分の視野を広げることができた。現地の人とコミュニケーションをとることは、旅行に行くことや、日本にいる外国人と話すことでもできる。しかし、今回の研修に参加しなければ、研修に参加した人達と話すことはなかったし、現地で働く日本人の方々からお話を聞く機会はなかっただろう。知らない場所で知らないことにたくさん触れ、学び、考えて素晴らしい経験をすることができた。今回の研修で得た知識や考え方、経験を生かしてこれからも新しいことに挑戦していきたい。そして、さらに自分の視野を広げていきたい。

4. 最後に

今回の研修に関わった関係者の皆様のおかげで大変貴重な経験ができました。
本当にありがとうございました。

シリコンバレー研修を終えて

保健医療学部臨床工学科1年 橋本夏澄

はじめに

私は今回、令和6年度産官学合同シリコンバレー研修に参加した。ここでは研修に参加した動機を述べた後、研修で学んだこと・体験したことを日程ごとに報告する。

学んだこと・体験したこと

〇1日目

時差ボケが治らず体調不良により自室で休んでいた。

〇2日目

早朝、アンケート調査を行うため散歩に出かけた。朝ランニングしている人や犬と一緒にいる人など様々な人に声をかけた。散歩してあることに気が付いた。それは、アメリカのポストがオシャレだということだ。家によって様々なデザインがあり、散歩していてとても楽しかった。



様々なポスト

午前中は地元企業の取り組みを知るため、「Sodick America Corporation」「Rakuten USA, Inc.」の2社を訪問した。

・Sodick America Corporation

ソディックアメリカでは、ソディック製品の「頭脳」にあたる“NC装置”と「神経」にあたる“モーションコントローラー”のソフトウェアとハードウェアの開発を行っている。実際に働いているエンジニアの方から様々なシステムの説明を聞くことができた。

・ Rakuten USA ,Inc.

Okura Elly さんから楽天の概要、今行っているプロジェクトの説明、アメリカと日本の働き方の違いについて聞いた。特に心に残っている言葉が一つある。ある生徒が「仕事をしている上で大切にしていることはなんですか？」という質問に対して、Okura Elly さんの返答の中に「嫌な奴に対して自分は絶対にこうはならないと思うこと」というのがあった。大学生になり様々な考えを持つ人と交流するようになった。その中には自分の苦手な人、自尊心を傷つけてくる人もいる。このような人と関わる時には Okura Elly さんの言っていたことを思い出そうと思った。



Rakuten USA,Inc での様子

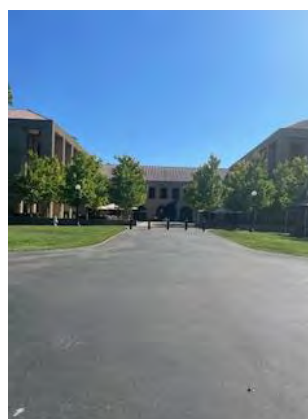


Sodick America での様子

午後はスタンフォード大学を視察した。ここでは建物の見学、アンケート調査を行った。d.school という所に立ち寄った際には、日本人学生に出会った。彼らは「J-StarX」というプログラムに参加し、スタンフォード大学で企業に必要なマインドセット等を学んでいた。自分と同じ年齢でも起業していたり、これから起業しようと考えている人を目の当たりにして、すごく刺激をもらえた。私はまだ自分の将来像がはっきりしていないので、彼らのように自分がしたいことを見つけたい。



スタンフォード大学での様子



○3日目

班員と一緒にサンフランシスコの様々な場所に行った。

・ ユニオンスクエア

最初に訪れたのがユニオンスクエアだ。ここは米国カリフォルニア州サンフランシスコにある広場で、周囲に高級ブランドや百貨店、ホテルなどがある。名称は南北戦争時代に北軍（ユニオン）の支持者が集まったことに由来している。



ユニオンスクエア



コイトタワー

・ コイトタワー

次にコイトタワーに向かった。たくさんの坂を上った後にタワーに登ったのでとても疲れたが眺めは絶景だった。お土産屋さんでとても優しいおじいさんに会った。その時の私は英語で話すことに恐怖心を抱いていた。自分の言葉が伝わらないというのは自分が思っていたよりも辛かった。お土産屋さんでおじいさんに話しかけられた時も上手に答えられなかった。その時おじさんは「大丈夫。君の笑顔はとっても可愛いから、それだけでみんな安心するよ。笑顔が大事なんだ！」と言ってくれた。その言葉を聞いた時、救われた気がした。優しい人に出会えてとても嬉しかったのと同時に、もっと笑顔を意識しようと思った。

・ フィッシャーマンズワーフ

昼食のためにフィッシャーマンズワーフに行った。ここは港であり、海独特の匂いがした。昼食にはクラムチャウダーパンを食べた。すごい量があり、完食することはできなかった。また、パンがすっぱかった。

・ ゴールデンゲートブリッジ

天気が悪く、全く見えなかった。

・ カストロ

リフォルニア州 サンフランシスコ の ユリーカ・バレー 近郊にある地域の名称。 1960 年代から 70 年代にかけては労働者階級の住民が多く住む地域であったが、その後アメリカ屈指のゲイタウンへと変化し、今日ではその最大規模の一つとされる。建物がとてもカラフルで、歩きながら写真を撮をたくさん撮った。



クラムチャウダー



カストロ通り

一日中サンフランシスコを歩き回って、とても疲れた。しかし新しい発見があったり、アメリカならではの文化に触れたりと新鮮で貴重な体験をたくさんできた。

○4 日目

午前中は ADAS & Autonomous Vehicle Technology EXPO の見学に行ってきた。様々な会社の新しい技術が展示されていた。英語での説明だったため聞き取るのがとても大変だった。しかし、精密な GPS や自動運転技術に触れることができてとても楽しかった。

午後はグループ・個人での発表を行った。前日の夜中まで全員で頑張って作ったパワーポイントでしっかりと発表することができた。個人での発表ではこの研修を通して学んだこと、感じたことを 1 分間にまとめた。他の人の発表の中には、面白い経験やその人の覚悟などがあって聞いていて楽しかった。

その後、この研修にご協力してくれた方と一緒にピザを食べた。アメリカでの生活や働き方について詳しく聞けてよかった。



展示会



グループ発表の様子

〇5 日目

日本に帰国した。

最後に

今回の研修では多くのことを学ぶことができた。また、報告書には記載できなかったがホテルで友達と一緒に過ごしたり、買い物に行ったりする時間がとても楽しかった。慣れない環境の中では息抜きをする時間も大切だと感じた。またグループ課題の解決のために一生懸命アンケート調査を行い、夜中まで会議をしてくれた班員をととても尊敬している。楽しいことばかりでなく辛いこともあったが、この研修を乗り越えたことを自信にして様々なことに挑戦していこうと思う。

今回の研修の費用を出してくれた両親、そして研修実施のために尽力してくれた皆様、アメリカで出会ったすべての方に心から感謝申し上げます。

シリコンバレー研修を終えて

保健医療学部臨床工学科 1 年 村田伊織

1. はじめに

令和六年産官学合同シリコンバレー研修は8月25日から8月31日にかけて行われた。この研修の目的は、事前学習で発見した課題についてシリコンバレーでの調査を通して解決策を考えることである。この目的を達成するため、シリコンバレーに拠点を置く企業や大学を訪問し、現地で働く方や学生の方に話を伺った。

この報告書では私の研修での課題解決のための成果や気づき、今後の目標について述べる。

2. 研修に参加した動機

私が今回のシリコンバレー研修に参加した動機としては、もともと海外の企業や働き方に興味があり、自分の目でその地域を見てみたいという安直な考えが元である。参加を決めた当初はそのようなあいまいな考えしか持ち合わせていなかったが、研修に参加するにあたってシリコンバレー、カリフォルニア州について調査を進めていたところ、シリコンバレーにあるスタートアップ企業に勤める方の考え方や生活なども知りたいと考えるようになった。

アメリカ、カリフォルニア州で働く日本人の方にお話を伺う機会は簡単に得られるものではないので今回参加するべきだと考えたことが最終的な動機である。

3. 取り組んだ課題

私は、COMONE の米田さんと私を含めた大学生四人の計五名で「生成 AI の今後の動向とその課題」をテーマに調査を行った。「生成 AI が進化していく中で論文等の著作権が保護されないこと」を課題点として挙げた。日本でも有名になり、利用者が増加した生成 AI の課題について IT の最先端であるシリコンバレーではどのような視点で考えているのかを調査するため、アンケートを行ったり現地で働くエンジニアの方の見解を尋ねたりした。一般の方と AI に精通している方とで質問内容を変更して調査を行った。

4. 現地での調査方法

調査方法としては、現地の人々に聞き込み調査を行った。Google フォームを作成し、それに対して回答を入力してもらうという形である。

アンケートの項目としては、生成 AI の利用の有無、生成 AI についての意見、将来どのようなようになってほしいかといった計五問の質問に対して回答してもらった。

アンケートを行った場所としては、宿泊していたホテルの近くのレイナー公園、アップルビジターセンター、Google ビジターセンターで一般の方に聞き込み調査を行い、現地で働く日本人の方にはお会いさせていただいたタイミングで質問を行った。

上記の訪問先でのアンケートの結果から、生成 AI についてのシリコンバレーに住む一般の方の意見を知ることができた。我々の予想としては、日本で聞く評判より解像度が高く、使用率も日本より高いと考えていたがシリコンバレーの人々も生成 AI についての印象は我々日本人と大差がなくあまり多くを知らないことが分かった。また、不安点として著作権の侵害を上げる人が多くいた。

このことから課題である「生成 AI が進化していく中で論文等の著作権が保護されないこと」に対して、我々は「フェアユース制度を導入すること」と、「著作権が侵害されていないかを判断する AI を開発すること」を提案する。



(写真 1) Apple Visitor Center



(写真 2) Google Visitor Center

5. 研修中に学んだこと

研修中、原健太さんの講義を受けた。原さんはフードデリバリーの会社である DoorDash でエンジニアとして働く一方で、日本酒をアメリカでも飲めるようにするために「HelloSake」というアプリを開発している。私は原さんの講義の中でアメリカの働き方について学んだ。特に、「自分」イコールビジネスモデルであるということはこれまで感じたことのない感覚だった。自分という人間をアピールポイントとして働くためには希少な存在にならなければならないということはなんとなく理解していたが、たくさんのスキルを組み合わせで自分だけができることを探さなければいけないと話していた点がとても印象に残った。私も今後、トレンドを追うのではなく自分が情熱をささげるものに携わることを信念に様々なことに挑戦したいと感じた。

今回のシリコンバレー研修では主に働き方や仕事の内容について伺ったが、街を見渡しても日本と異なる良い点が多くあった。

まず、人のフレンドリーさである。日本にいと他人にはなるべく声を掛けられないほうが良いと感じる場面があったが、挨拶をされるということはとても心地よいものだった。ほかにもお店で物を買うときも相槌のように”Have a good day!” と言ってくれて心が温まった。こ

のことから日本人は他人に対して淡泊であることを感じた。

また、私が一番日本にもあってほしいと感じたものはライドシェアサービスである。私は金額の関係で「Lyft」のみ利用したが、配車のタイミングで行き先を指定し、金額も確定するというのは日本のタクシーではありえないことである。日本で利用するタクシーは乗り込んだ後に目的地を告げ、遠い場所を指定するといやそうな顔をされたりすることもしばしばある。事前に目的地がわかっているならばそのような不満は解消されるし、道を間違えられて金額がかさむこともない。迎えに来てくれるまでの所要時間もとても短い。早急に日本でも取り入れるべきサービスだと感じた。



(写真3)原さんの講義を聞く一同

6. 今後の目標

約一週間の研修を終えて、できた目標が二つある。

一つは、いままでやりたいことがあっても周りの目を気にして止めることが少なくなかった。今後はできない理由がない限りやってみて間違ったら戻ったり進まなくなったら中断したりして何事もチャレンジすることである。

二つ目は、日本に来ている外国人観光客にも話しかけることである。日本人の観光客の方には問題なく話しかけることができるが、外国人には話しかける勇気が出なかった。しかし、今回私が外国人観光客の立場で現地の方に話しかけられるととてもうれしかったので、この気持ちを日本に来た外国人の方にも味わってほしいと感じたからである。

7. 最後に

この報告書ではシリコンバレー研修で学んだこと、感じたこと、今後の感想を述べた。

最後に、シリコンバレー研修でお会いした方々、事前学習から一緒に進めてくださった市役所、企業、大学の職員の皆様、学部生の皆様本当にお世話になりました。ありがとうございました。

シリコンバレー研修をとおして

保健医療学部臨床工学科 2年 三輪亜胡

○ 参加動機

“行動力”これが私がシリコンバレー研修に参加した一番の理由だ。私の人生最大の目標は充実した一日だったと感じられる毎日を送ることである。初めての経験を楽しみ、斬新なアイデアに心を惹かれる。このように考え感じていながら実際は行動に移せていないことが多かった。海外に行きたいと思っていたこともあるが、“準備が大変そう”“英語が苦手”ということを理由に今まで行動に移すことはなかった。自分の目標を達成するためには自ら動かないといけないと感じ今回の研修に参加するに至った。

○ グループの課題、現地での調査

私たちのグループの課題は日本オープンシステムズ（JOPS）が抱える「知識と技術をもった人を会社に入社してもらうにはどうすればよいか」という課題であった。この課題を解決するヒントを得るためにシリコンバレーで活動を行った。シリコンバレーでの活動内容としては質問内容を考え Forms の QR コードを利用し、アンケート活動を行った。さらにアンケートを集計し中間発表にのぞんだ。アンケートの内容は、以下の3つである。

1. あなたが入社したいと思う企業の条件は何ですか？最も重要視する一つを教えてください。
2. あまり知られていない企業がブランド認知度を高める胃にはどうすればよいですか？
3. あなたが会社の社長になったつもりで考えてください。どのような人が、会社に入ってほしいですか？

現地でのアンケート調査は主に公園、ショッピングモール、サンフランシスコへの移動の電車内で行った。街頭アンケートを行う上で一番苦労したことは、初めから QR コードを提示することで嫌な印象を与えてしまい質問に答えてもらえなくなるといったことが多々あったことだ。はじめのうちは一度断られてしまうとすぐ諦めてしまっていた。しかし、アンケートを進めていく中で、なぜアンケートを取っているのか、自分はこういった人物なのかを細かく説明することでアンケートに協力してもらいやすいことに気づいた。街頭アンケートは現地の人に話しかけるととてもいい機会になった。



図 1 「サンフランシスコに向かう Caltrain」

○ 感じたこと

私がこの研修で学んだことは“諦めないことのすばらしさ”である。日本で生活をしていると、少し周りと違ったことをしようとするすると周りから冷たい目で見られ、相手にされないということは少なくない。「普通は」と言われ自分の考えを否定されたこともある。私はこのことに関して違和感があった。しかし、今回シリコンバレーで話を聞くことができた方々には共通して、“自分の好きなことを誇りをもって行っている“という印象を受けた。自分のしたいことが難しい事であったとしてもどうにかして成功させる道を考えるという印象が強くのこった。実際に成功するまでの道が困難であったとしても、好きなことができるというだけで幸せであるのではないかと感じた。それはシリコンバレーで出会った人全員が輝いていると思ったからだ。”プロアクティブに行動“この言葉にも”諦めるよりも行動“のような意味が込められていると感じた。プロアクティブに行動した先に自分の求めるものが見つかったり、協力してくれる仲間が増えたりといった自分にプラスのことがきくとあると私は信じている。この研修を通して自分の選んだ道を恥じることなく突き進んでいきたいという思いが強くなった。

○ 最後に

私はこの研修をとおして成長できたと感じている。一週間の短い期間ではあったがたくさんの人と関わり、話し合い、刺激され、与えられた課題以上に多くのことを考えたとても貴重な経験だった。

最後に、今回の研修に関わってくださった方々、本当にありがとうございました。

「公立小松大学産官学合同シリコンバレー研修報告」

臨床工学科 3 年 川村理帆

1. 目的

一つ目は、普段の慣れた環境から出て多くの刺激を受けることだ。日常生活では体験できないことを実際に体験し、より多くの人とコミュニケーションをとることで、これまでの自分の価値観や物事の見方が変わるのではないかと思った。

二つ目は、海外の自分の興味のある分野の技術を自分の目で確かめることだ。私は、ヒューマンインタフェースや VR に興味があり、メタバースが進んでいる国に行き、その技術を実際に見たいと思った。

以上の 2 つが目的である。これらの目的を達成するため、積極的に行動し、多くの学びを得ることを意識して研修に臨んだ。

2. 研修内容

研修では沢山の貴重な体験をしたが、特に印象に残っていることをピックアップして記す。

2-1 Sandbox VR での体験

4 日目のサンフランシスコでのグループ行動で、Sandbox VR という施設でフルボデイトラッキングを用いた完全没入型の「イカゲーム」の VR 体験をした。思っていた以上に再現度が高く、スリルがあった。日本にはまだ上陸していないため、とても貴重な体験だった。

2-2 スタンフォード大学でのフィールドワーク

3 日目にスタンフォード大学へ行き、フィールドワークを行った。事前に Google フォームでアンケートを作成し、QR コードをスキャンして回答をしてもらう手法をとった。最初は知らない人に声をかけることに少し抵抗を感じていたが、快く引き受けてくれる人が多く安心した。また、スタンフォード大学の学生と話したり、LinkedIn で繋がったりすることができた。



図1 Sandbox VR



図2 スタンフォード大学

3. 気づき・学び

今回の研修では多くの学びがあった。特に、大切だと感じたこと3つを書く。

一つ目は、積極性だ。フィールドワークを通して、自分から人に話しかけに行くことで、新たな知識を得たり、自分とは違う価値観に触れたりすることができた。この経験から、積極的に自ら行動することが大切だと気づいた。

二つ目は、事前学習だ。これから行く場所、会う人などについて、それまでにその場所や人について調べ、質問したいことなどをリスト化しておくことが重要だと学んだ。今回の研修では、次の日に行く場所や話を聞かせてもらう人について、前日には調べておくように心がけた。

三つ目は、適応力だ。4日目のグループ行動で、行く予定だった場所が閉まっていたり、帰りのカルトレインが列車のトラブルで途中で運転見合わせになったりと、想定外のことが起こった。この経験から、想定外のトラブルが起きても臨機応変に対応できる力が必要だと学んだ。

四つ目は、リーダーシップだ。今回の研修でグループの学生リーダーを務めた。渡米する前の4日目の行動計画を進めることから始まり、帰国後も成果報告会の資料の作成などグループでの活動が多くあった。目的のために自分が率先してできることを探して行動することが重要だと学んだ。

4. まとめ

今回の研修では、貴重な経験を沢山し、多くのことを学んだ。これらのことを活かして、今後の自分の目標に向かって頑張りたいと思う。

R6 年度 公立小松大学 産学官合同シリコンバレー研修 報告書

株式会社 COM-ONE

代表取締役社長 米 田 稔

■ はじめに

今年3月下旬に上田芳弘教授から、今回のシリコンバレー研修についてご紹介を頂いたが、躊躇していた。しばらくして「IT 企業のトップとして一度はシリコンバレーに行ってみたい」という気持ちが強くなって来て、4月中旬に参加する事を決めた。また、昨年初から日本でも普及、活用が拡大してきている「生成 AI」の進化の勢いのすごさを感じていた事もあり、本研修への期待が次第に膨らんだ。

1. 事前研修と Slack による情報交換

事前の特別講座は2回のみ参加となってしまう、また「企業課題を提示する」というミッションや意義を認識しておらず、チームに混乱を招いたかも知れない。

一方で Slack により、チームのテーマを「生成 AI の動向調査と社会普及時の課題」として提案し、早々にチーム全員の了解が得られた。また、Slack では参加者全員の自己紹介や、現地関係者との個別アポイントができた事は、情報共有の手段としてとても便利で効果的と感じた。AI 関連のトピックについて書込みを行ったが、リアクションが少なく、もう少し盛り上がりたかったと思う。

2. レクチャー、視察、事前アポイント先でのミーティング

(1) 榊本特任教授 (B-Bridge International)

榊本氏の経歴やシリコンバレーにきた経緯、豊富な経験や知識、考え方(生き方)を伺うことができ、感銘を受けた。

(2) 原健太氏 (DoorDash)

事前に Youtube でインタビュー動画を拝見していたが、大学在学中にアプリ開発の実績を持ち、渡米してから実力を発揮して、日本酒販売を新しく事業として立ち上げるなど感心しきりで、Visa 取得の難しさを強調している点も参考になった。

(3) Apple Visitor Center, Google Visitor Center (Apple については後述)

(4) Yasuko Shusa 氏とのミーティング

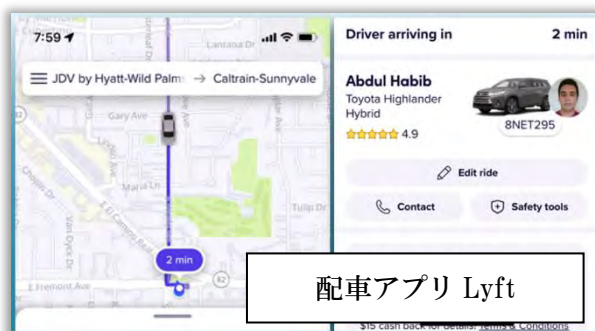
医療画像や、臓器移植などの最新技術についてディスカッションを行った。

3. 企業訪問、スタンフォード大学視察、来訪者ヒアリング

Sodick , Rakuten, Stanford University を視察後、ホテルロビーで Yosida 氏 の話を聞き、エンジニアとして活躍されている実情などをヒアリングできた。

4. サンフランシスコ・フィールドリサーチ

電車でサンフランシスコに移動し、ピア 39, Golden Gate Bridge, カストロ地区などの観光スポットを視察した。配車アプリの Lyft(Uber) の便利さや、自動運転タクシーWaymo が街中をたくさん走っている事にとっても驚いた。



配車アプリ Lyft



自動運転タクシー

5. ADAS EXPO 見学, Apple Vision Pro 体験

展示会は残念ながらあまり見るものがなく、予約していた Apple Vision Pro の体験のために早々に Apple Visitor Center へ向かった。Vision Pro は実空間と 3D 映像が融合する体験だけでなく、広大な景色やリアルな映像空間が目前に再現される事に驚きと、次世代のデバイスとしての可能性を感じた。



Apple Vision Pro 体験

6. グループ毎の学生プレゼンテーション

チーム COM-ONE を筆頭に各グループの中間発表が行われた。学生たちはそれぞれ前日の夜遅くまで準備していたので、その努力を称えたい。ただ、当社の課題が研修目的と乖離していたためか、インタビュー項目の集計結果が課題解決には結びつかないように感じた。

この点については別の視点・観点で解決策を見いだしてくれると考えている。



各グループの中間発表

■ 所感

シリコンバレーが MAG7 という超巨大 IT 企業が結集している地域であり、この地で成長を遂げた有名 IT 関連企業も数多く存在し、たくさんのスタートアップ企業も集まって、城下町を形成している。

世界中の「お金」と「人」が集まってくる感覚で、一攫千金を狙う人、投資先を探す人、技術やアイデアを目利きする人、同調や協力する人もいて、お互い切磋琢磨しながら、その環境の中からイノベーションが次々と起こる「エコシステム」が形成されていることを学ぶことができた。



また、色々な人の話を聞いて特に感じたのは、「行動における積極性」と「情熱をそそげる事に集中して携わるという生き方」が共通している点だった。

シリコンバレーの実態は、物価の高さにも驚いたが、やはり現地でしか分からないことは色々あって、経済環境や、その背景にある企業や個人の考え方の違いも知ることができた。そして、グループワークを通して若い学生と色々な体験を共有できたことや、ディスカッションしたり、雑談したりも、とても楽しい時間と感じた。

最後に、今回貴重な機会を頂いた公立小松大学、小松市、B-Bridge の皆様に感謝いたします。

シリコンバレー研修を終えて

株式会社日本オープンシステムズ 藤井 果奈子

はじめに

当社の課題は事前授業の中で公立小松大学の学生達と議論を重ねていった結果「知識や経験を持つ、エキスパートの人手不足」に焦点を当てることに決まりました。社会人経験の無い学生と企業課題を共有するのは難しい部分もありましたが、PCM 手法を学びながら学生にも比較的想像しやすい課題に落ち着きました。シリコンバレー研修では、学生には課題解決の調査を中心に行動をして頂き、私たち企業側はアポイントメントを取った方々に現地でお会いし、アメリカと日本を比較しながら現在の日本で働くことの良い面・悪い面を見直すことで課題解決の糸口を見つけようと考えました。

5 日間の研修期間を通して

1. 学生との交流

Hiro さん（B-Bridge 榎本博之さん）からは今までの自分（日本での自分）をリセットして、“Proactive” に行動することを研修の心構えとして示されました。学生達は作成したアンケートの回答を集めるため“Proactive” に話しかけており、私は学生と全ての行動をともにしたわけではありませんが、一緒に行動する間はアンケート調査に奮闘しました。



初日：オリエンテーション

2. 人との出会い

毎日一人の現地の方とお話することを目標とし、結果、B-Bridge の Hiro さん、Miwa さん、Taka さんを含め、原健太さん、佐藤公一さん、Koki Yoshida さん、Asako Hayase さん、また最終日の懇親会に来て下さった Yasuko Shusa さん、Masao Sambongi さん、Max well Jong さん…想像以上に多くの方と話すことができ、たくさんの刺激を受けた日々となりました。特に、現地で働く女性の方にお会いしたい旨を Hiro さんに伝えたところ、早瀬さんを紹介していただき、お会いすることができました。

上記の方々のレクチャーやディスカッションを通して、解雇（レイオフ）については

マイナスに捉えられていないことや、アジェンダを出して長時間の打合せ時間を取らない（必ず結論を出す）など、制度そのものに加え日々の業務にスピード感がある印象を受けました。



Koki Yoshida さんとのディスカッション

またお会いした方全員に共通する点は、皆さんパワフルで、バイタリティーに溢れていることです。それは日本とアメリカの雇用の違いや、外国人として異国の地で働く選択したことなどが関係するように感じました。

イノベーション、課題解決への道

Hiro さんはオリエンテーションの際に、イノベーションとは0から1を生み出すこと、今までに誰もやったことがないことに挑戦することであると話されました。当社全体がイノベーションを起こす企業となるのは現状のままでは難しいと思います。皆、真面目に日々の業務をこなしますが、それ以外のことに時間を割く余裕が無いことや、ワークライフバランスを大事にしたいと考える社員も多いです。自社サービスのリリースや本社の移転など過渡期ではあると思いますが、まだまだ課題は多くあるように感じます。

今まさに解雇規制緩和が話題として上っています。雇用の形、仕事の形を変えるときなのかもしれないと、シリコンバレーでの経験を通して強く感じました。改革の先に人手不足によって起こる問題の解消、イノベーションを起こす企業の姿、社員がもっといきいきとしている企業の姿があるように思います。

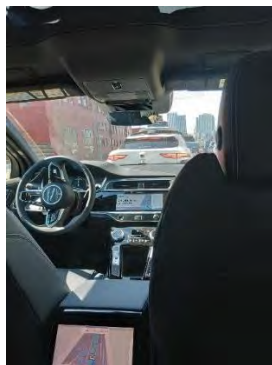
おわりに

ご縁があって今回のプログラムに伊東と二人で参加させて頂くことになり、4月から数回に渡って学生と共に事前授業に参加しました。今回一緒にチーム活動を行った東出さん、藤森さん、三輪さん、佐藤さん、並びに伊東チームの皆さん、課題についての調査本当にお疲れ様でした。

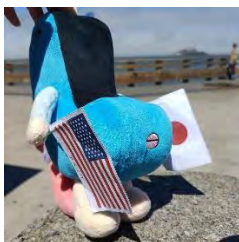
また、今回お会いした方と LinkedIn 等を交換し、繋がりが生まれたことは、研修の中で良かったことのひとつです。現状の問題を個人の力だけで解決することは難しいですが、今はこの研修で生まれた繋がりを大切にしていきたいと思います。

研修に関わったすべての方へ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

ギャラリー



サンフランシスコにて、無人タクシー（Waymo）の乗車を体験



当社マスコットキャラクター：JOPS くんアメリカの土を踏む

シリコンバレー研修報告書

株式会社日本オープンシステムズ

伊東鼓乃

【事前授業】

「知識と技術をもった人を会社に入社してもらうにはどうすればよいか」を課題にし、解決方法を模索していくことに決定した。

【現地での体験】

■ 2日目

・原健太氏の講演

シリコンバレーでエンジニアとして働いている原健太氏の講演ではグローバルなキャリア思想、日本とアメリカの働き方の違いなどについて伺った。キャリア思想については希少な人材について、3つの分野においてそれぞれ1000人にひとり、100人にひとり、10人にひとりになることで100万人にひとりの人材になれるというお話であった。今後自分のキャリアを考えるうえで希少な人材になるための考え方を得ることができた。日本とアメリカとの違いについてではアメリカと日本企業は決定するまでに掛ける時間が全く異なり、アメリカは決断が早いというお話が印象に残った。



■ 3日目

・Rakuten USA, Inc 訪問

Rakuten USA, Inc へ訪問した。企業内を案内され社員が自由に使える食堂やトレーニング施設、ボードゲームや卓球など様々なものが置かれたリフレッシュ用の部屋、社員の方が働いているエリアを見学した。社員の方が働きやすい空間づくりを大事にしていることが伝わってきた。



- ・スタンフォード大学訪問

スタンフォード大学へ訪問した。グループ課題用に作成していたアンケートの回答を集める必要があった。小松大学の学生と同様に自分も積極的に現地の学生に声をかけてアンケートへの協力をお願いした。普段の生活では挑戦しないことに挑戦するという目標があったため積極的に拙い英語ではあるが現地の学生に声をかけることができた。



■ 4日目

- ・サンフランシスコでフィールドサーチ

学生と市内でグループ活動を行い日本では体験することができない最先端の技術を体験した。



VR 技術を体験できるエンターテインメント施設の sandboxVR では VR ゴーグルとセンサー入りのベスト、両手首、両足首にセンサー付きのバンドを巻いて VR 空間でゲームを行った。自分の動きがなめらかに仮想空間のアバターに反映されていたり視覚、聴覚の制限により仮想空間で起きることがとてもリアル感じられたりし VR 技術を楽しみながら体験することができた。



サンフランシスコ市内では waymo という無人タクシーが走っている。この waymo はアメリカ国内でも限られた場所でしか走行されていない。その限られた場所のひとつであるサンフランシスコに来たためせっかくなので乗車した。waymo は一年ほど前までは乗車に必要なアプリケーションのアカウント発行を数か月ほど待つ必要あったが現在はすぐにアカウントが発行され観光客も乗れるようになっている。サンフランシスコ市内を歩いていると waymo がごく普通に走行していた。日本では見ることがない光景と無人タクシーが当たり前のように走行している事実に感動した。実際に乗車してみると当たり前だが運転席には誰も乗っておらず乗車案内のアナウンスがされ、目的地に出発し



た。乗車時は車線変更や合流などもスムーズに行っており何より安全運転であったことが印象に残っている。そして驚いたのが渋滞にはまった際に進路を変更して当初走行予定だった道順とは違う道順で目的地まで走行した。進路変更まで(渋滞にはまっている時間)は長かったが周りの車の走行状態だけではなく渋滞にまで臨機応変に対応するとは思っていなかったため驚いた。サンフランシスコでみた光景をいつか日本で見ることが楽しみである。

■ 現地で働いている方との会話

縁をつないで頂き現地で働いている方とお話させて頂く機会があった。働いている企業により特徴や日本の企業との違いは様々であったが共通し、残業をせず家族との時間やリフレッシュの時間を大切にしていた。そのことが仕事に良い影響を促しているときき、残業ありきの企業が多い日本との違いを感じた。また話を伺った方の多くが仕事後に現在自分の仕事に直接関係することではないことについて時間を割いていることから仕事にメリハリをつけて行うことの大切さを実感した。

しかし残業しないことやメリハリをつけて仕事を行うことは言葉でかくのは簡単であるが実際に行うとなると働き方の改革が必要であり一社員である私だけの問題ではなくなってくる。会話していく中で無駄な会議がないというお話があった。会議ごとに明確なゴールを設定することはすぐに取り入れることができそうに思えるためできることから始めていこうと思う。

最後に、貴重な機会をご提供頂いた公立小松大学の皆様、B-Bridge の皆様をはじめとするご協力頂いた皆さまへ心よりお礼申し上げます。

産官学合同シリコンバレー研修

小松市 市長公室広報秘書課
事務員 渡辺 雄也

「産官学合同研修」として開催された当研修は、第1回目は宮橋市長とスマートシティ推進課 竹内主査が出席され、続く2回目に参加させて頂いた。

シリコンバレー研修は、世界の先端技術と革新的なマインドセットを学び、国際的な働き方や文化的な違いを理解するためのプログラムである。Apple や Google のような多国籍企業が集まるシリコンバレーにて、現地で活躍する日本人と深いディスカッションを交わし、視察やグループワークを通じて、スタートアップや新製品・サービスの発展について学んだ。さらに、多彩な人種や考え方が集うシリコンバレーでは、ダイバーシティな日常を体感し、広い視野から課題をみつめる視点を深めた。これらの経験から、シリコンバレー研修は多様な視点と恐れず挑戦をする精神を磨く重要な機会となった。

1. 事前学習

グローバルな視点を持つ意識を養い、SDGs に則った持続可能な開発方法の習得を目的とした講義「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」（講師：岸本昌子特任教授）へ参加した。（第3回、4回に出席）具体的には、地域の産業や行政の課題にスポットライトを当て、シリコンバレーの先進的な事例やサポート体制を参考に、プロジェクトを計画するための手法としてPCM「プロジェクト・サイクル・マネジメント」を活用し、問題解決のための新たな思考の方法やスキルの向上を図ることを目的とする。

小松市からはふるさと納税の仕組みとその課題を発表し、その後ワークショップ等で、シリコンバレーで取り組む課題やその解決方法について議論を行った。

班での課題を選定するにあたり、「ふるさと納税」は日本独自の地域支援制度であり、アメリカでは馴染みのない制度から調査が難しいため、現地行政のまちづくりと広報戦略について調査をすることにした。

2. 現地での研修

【1日目】

長旅を終え、無事に参加者全員が宿泊先「Wild Palms Hotel」に到着。各自チェックインを済ませ、早速 榎本博之特任教授（B-Bridge International Inc.）によるオリエンテーションを受けた。

内容としては、この研修を有意義なものとするための3つキーワード「Interactive: 双方向に」、「Proactive: 積極的に」、「気づき: 周りを見渡し、人と話、人の話を聞き、様々なこ

とに気づく」を持つようご教示頂いた他、グループディスカッションやスケジュール確認を行い終了。

【2日目】

いよいよ本格的にこのシリコンバレー研修が始まる。

初めに、DoorDash(サンフランシスコに本社を置くフードデリバリーサービス運営企業)の Staff Software Engineer である原 健太氏の講演を拝聴。講演の中で原氏は日本企業と米国企業の違いについて強く話されていたのが印象的であった。日本企業の特徴は流動性が低く、スピードが遅いこと、そして単一民族で構成されており、これは年功序列、終身雇用、解雇裁判などの制度や合議制といった経営スタイルに起因しているということ。また、アメリカは様々な人種・文化が入り混じっており多様な考え方が生まれやすいことから、異文化を取り入れる文化やスピード感が米国企業に比べて低いと指摘されていた。

また、ご自身の経験から、ビジネスモデルを個人＝自分に捉えることが大事であると話された。誰でもできる仕事から自分にしかできないやりがいのある働き方を見つけることが大事であり、それは自分が情熱を注げるものが鍵となるということであった。

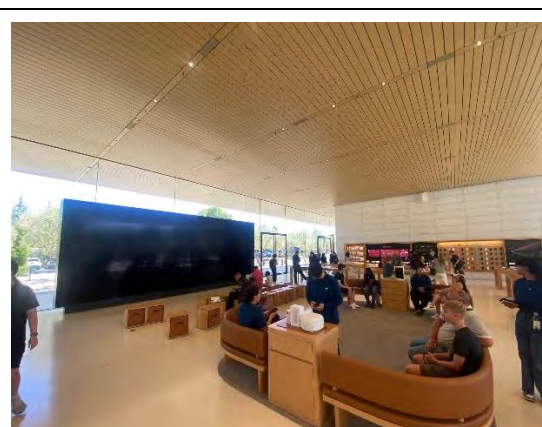


DoorDash Staff Software Engineer
原 健太氏

続いて、Apple, Google, Intel の各 Visitor Center を視察。身近に最先端のテクノロジーを体験することができた。



原氏の講演



Apple Visitor Center

【3 日目】

Sodick America Corporation と Rakuten USA, Inc. を視察。

Sodick America では、CEO 米田 康治氏より企業の概要について拝聴した。自社製のモーションコントローラをつくる拠点として 2000 年 2 月アメリカに設立、主にソディック製品の「NC 装置」と「モーションコントローラ」のソフトウェアとハードウェアの開発を行っている。事務所見学では、実際に働いている風景を間近に見させて頂き、社員の方ともお話をさせて頂いた。

続いて、Rakuten USA, Inc. へ移動。Elly Okura 氏 (Strategic Partnership Manager) が社内を案内して下さった。社内には朝・昼・夜と社員無料の食堂が備わっている他、いたるところに会議室が備わっており実際にオンラインミーティングや社内会議をしている風景を見学することができた。(会議室の名前が全て町の名前であった) また社内にはジムの他、卓球台やダーツが置いてある休憩スペースがあり社員が交流しながら遊べる空間なのだが以外とそういう場で新しいひらめきが生まれることがあるという。そのため壁にはホワイトボードが設置されておりいつでもディスカッションやメモをとれるよう整っており大変興味深かった。



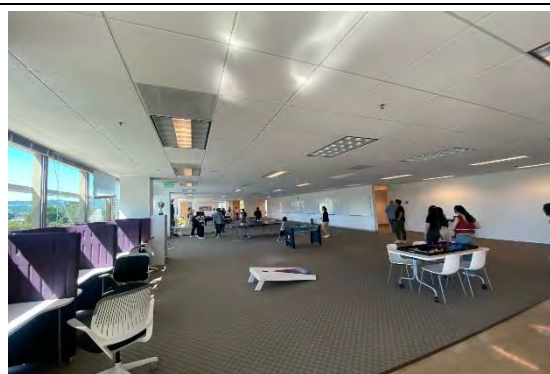
Sodick America Corporation 講演



Sodick America Corporation 見学



Rakuten USA, Inc. 講演



Rakuten USA, Inc. 休憩スペース

【4日目】

スタンフォード大学を訪れ、大学内を見学。スタンフォード大学は起業家精神に優れた大学として知られており、スタートアップ企業への資金提供において世界で最も成功している大学の1つである。

またこの日、小松市チームは大学内で学生等に Google フォームによるアンケート調査を実施した。夏休み期間中であつたため学生は少なかつたものの、積極的にコミュニケーションをとりに行く小松大学生の姿を見て自分も負けじとアンケート調査に挑戦した。



大学内の大聖堂前で



学生によるアンケート調査開始！



自分もアンケート調査にチャレンジ！

 Questionnaire on administrative agency We are students of Komatsu University in Japan. We are conducting this survey to gain a deeper understanding of our experiences and feelings in the field and to gather useful information. We appreciate your cooperation in completing the survey.	 How often do you attend local community events? ☐ Participate often ☐ Participate occasionally ☐ Participate rarely ☐ Do not participate at all What do you think was particularly effective about the city's public relations activities and what should be improved? 回答を入力 What do you think ideal urban development is like? What efforts do you think the government should make to do that? 回答を入力
アンケートのお願い	アンケートの内容（一例）

【5日目】

この日は班でのフィールドリサーチで自由に移動ができたため、サンフランシスコまで足を延ばしアンケート調査と在サンフランシスコ日本国総領事館へ訪問し、副領事の黒岩巧充氏と面会をした。

アンケート調査では、Japan Town と PIER39 で実施。Japan Town は日本文化を感じる事ができる街並みであり、地元住民から観光客まで多くの人々が訪れる。回答者たちは大変協力的で、地元住民の生活や文化への誇り、観光客に対するおもてなしの心などの多くの意見を得ることができた。

在サンフランシスコ日本国総領事館の黒岩氏から、アメリカの行政サービスについて直接お話を伺った。黒岩氏は、アメリカの行政サービスは「半官半民」とであると説明した。つまり、日本で行政が担当する多くの業務は、アメリカでは民間が運営していることを意味し、行政から直接リーチアウトすることがほとんどないとのことであった。

	
在サンフランシスコ日本国総領事館 黒岩氏との意見交換	

【最終日】

最終日、ホテル内にて最終プレゼンの準備及び発表を行った。

発表には、B-Bridge International Inc. のメンバーが参加してくださり、発表の評価・コメントを頂いた。



プレゼンに向けての資料準備の様子



発表の間では緊張感が走る



小松市チームによるプレゼン発表

【所感】

課題に取り組むにあたり小松市チームのキャプテン國定君、まとめ役の小宅君、明るくチームに活力を与えてくれた有澤さん、常に冷静沈着な宮崎君に感謝申し上げます。

行政の代表として参加させて頂いていること、自身の英語力が乏しいこともあり当初は不安と緊張でいっぱいでしたが、このメンバーのおかげで無事に乗り切ることができました。

シリコンバレー研修で得た全ての経験が自分にとってとても大きな刺激となりました。また同時に、自分自身に対して危機感を感じ自分を振り返るきっかけとなりました。

現地の方と直接交流し、その情熱や探求心、困難に立ち向かう力強さを目の当たりにし、自分の視野を広げる新たな視点を提供していただきました。

過去の視点に囚われず、常に新たな発見や課題解決のために学び続けるアントレプレナーシップのあり方は特に印象的でありました。

シリコンバレーでの研修を通じて得た知識と経験は、今後の働き方に大きな影響を与える大変貴重なものとなりました。この経験を活かし、挑戦と失敗を恐れず自己を成長させるために学び続け、何事にも積極的にチャレンジしていきます。

最後に現地アテンドの B-Bridge 様、小松大学の先生方、学生の皆様をはじめ当研修に携わっていただいた方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。